
ハルケギニア物語～SSをかける少年～

紅茶公ジョー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルケギニア物語〜SSをかける少年〜

【Nコード】

N4286Q

【作者名】

紅茶公ジョー

【あらすじ】

ごく普通のどこにでもいる高校生山田一郎は不慮の事故により死んでしまった。

一郎は天国で『人生を再スタートするチャンス』を与えられた。このチャンスを生かし一郎は『ゼロの使い魔』の世界に転生し、第2の人生を送ろうと奮闘する。

しかし、一郎は気づいていなかった。自分がこの『ゼロの使い魔』の世界、ハルケギニアの世界を変えてしまったこと、自分がこの世界に深くかかわっていることを。

とある大戦についての記録（前書き）

この小説には以下の成分が含まれています。

ご都合主義 150%、原作崩壊 100%、チート 80%、キャラ崩壊 70%

それに加え文章もかなり下手です。それでもよかつたら見てくださ
い。

頑張って書きます。

とある大戦についての記録

ブリミル暦6214年、4年にわたった第一次ハルケギニア動乱はブリタニア連邦王国、オスマン公国、クルデンホルフ大公国、帝政ゲルマニアからなる連合国側の勝利に終わった。この戦争の発端はロマリア連合皇国領邦オスマン公国の独立問題であった。ブリタニアはオスマン公国解放、東方進出の足掛かりを取得するべくロマリア連合皇国に宣戦布告。ほかの2国もこれに続いた。対するロマリアはトリステイン王国、アルビオン王国、オストマルク帝国を味方につけ同盟国を結成し対抗した。しかし6212年にアルビオンが降伏しゲルマニアがオストマルク帝国軍を打ち破りブリタニア軍がトリステイン本土侵攻に成功。同盟国軍は劣勢に立たされた。6214年アンスールの月エオローの週ラーゲの曜日（7月5日）にガリアの仲介でラグドリアン講和会議が開かれ、オスマンクルデンホルフ両国の独立が承認され戦争は連合国側の勝利に終わった。

この戦争では様々な新兵器が登場し、小国家が滅亡し、多くの戦死者を出した。この経験を生かしトリステイン、ゲルマニア、ガリアの間にスフィア国が建国された。この国家は「他国を侵略せず、他国を侵略されない、他国の争いに介入しない」を理念にした中立国家であり、今度大きな戦争がおきたときには戦争終結の足掛かりをつくる役目を担うようにした。

ブリタニアでは戦勝により旧オストマルク帝国領を割譲され東方進出の中継地点を入手した。しかしロマリアやトリステインとの関係は悪化した。ガリアも戦後政変が起きて反ブリタニア政権が発足し

孤立主義に傾かざるおえなくなった。トリステインとは戦後制海権をめぐる争いがおき現在でも国交はない。ロマリアも異端者を認めるわけにはいかないという理由で国交を拒否している。

出典エドワード・マリソン著『ハルケギニア動乱史』 第一章 才
スマン問題とブリタニア連邦王国

とある大戦についての記録（後書き）

はじめまして。

栗男爵です。今回初めて小説を投稿させていただきました。

これからよろしく願います。

転生（前書き）

山田一郎は最近不思議な夢を見るようになっていた。それは中世の兵士が近代の兵士と戦争をする夢だった。最初はこれについてあまり興味を示していなかったがあの事件が起きるまでは。

転生

自分は最近変な夢を見る。それは戦争の夢だ。戦場はまるでアルプスの少女ハイジに出てきそうな高い山と草原に囲まれた村だ。しかしあたりは炎に包まれあたりには腕のもげた村人の死体や焼け焦げた兵士の死体などが散らばっている。

俺はそこで敵兵と対峙している一士官として戦っている。敵はカーキ色の服にゲートルをまといライフル銃を構えた兵士に第一次世界大戦時のmark?戦車である。対するこちらは甲冑をまとった兵士や馬に乗った兵士といった中世時代の装備をした兵士しかないのだ。それは戦国自衛隊の欧州版といったところだ。

しかし、この戦いは勝敗がわからない。ある程度までいく前にいつも目が覚めてしまうからだ。

最初は昔見た映画や漫画が混ざったものだと考えていてあまり気にしていなかった。しかしこの夢が正夢になってしまうような事件が起きてしまったのだ。

あの日の俺は注意力散漫であった。あまりにも急いでいたからだ。

なぜなら今日5時からのテレビ番組の予約を忘れてしまったからだ。しかしこのまま普通の道を通ってでは確実に間に合わない。

こうなりや奥の手だ。

この判断が自分の人生を大きく変えてしまった。それを知る由もないまま俺は自転車を立ちこぎし、普段通らない信号のない交差点を渡ろうとした。

「よしっ！このままいけば5分前にはつく！」

腕時計を見て緊張が抜けた俺は、ロクに見向きもしないで普通の道路に飛び出した。するとそこには大きなダンプカーが迫って来た。俺はよけようとしたがすでに視界がダンプの正面に占領されていた。

どんっ！

鈍い音とともに俺の体は中に上がった。

俺は死ぬのか？

それがこの世にいたときの最期の言葉であり、見たのは雲ひとつない碧い空であつた。

俺の体は鈍い音でたたきつけられそれと同時に意識はくらい底へ消えていった。

「山田さん。起きてください。あなたの番ですよ。」

誰かに肩をたたかれて俺は起こされた。ゆっくりと体を起こすと自分分はベンチに寝かされていて目の前には女性が立っていた。

「ここは、どこ？」

「冥府ですよ。あなたは現世で死んでここにやって来たのです。」

「そうか、俺は死んだのか……。」

その言葉を聞いて俺はしょぼんとした。まだやりたいことがいっぱいあったのにこんなところで死んでしまうとは。後悔の念が頭をよぎった。そんな顔を見た女性は天使のような笑顔をしていった。

「そんなに落ち込まないでください。まだ終わってませんよ。」

「どっという意味ですか？」

「その話はあちらにいつてしませんか？ここでは難ですし。」

彼女は観光名所を案内するガイドのような手でカウンターを指差した。この建物は受付がありまるで市役所のようなものだった。

とりあえず俺は彼女に言われた通りにカウンターに座る。彼女も同じようにして座り互いに対面するような形になっている。

落ち着いて見てみると彼女は市役所役員のような服装で髪はまとめてあった。その彼女は1回咳払いをすると真面目な顔つきになった。

「では話の続きをさせてもらいます。あなたには3つの選択肢があります。1つはこのまま成仏して天国に行く。1つは幽霊になりさまよう。そしてもう1つは転生してほかの世界に行くか。」

2つ目はないにしろ、1つ目と2つ目は魅力がある。天国に行けるというのは自分は悪い行いをしていないからである。それでもいいだろう。しかし、それでいいのか？俺にはやりたいことがたくさんあったはずではないか！それを諦めて成仏するのはいかかがなものか？

そんな考えが頭をよぎった。だがしかし、現世の思いは強かった。ここで成仏したくない。まだ死にたくない。もう一度チャンスがほしい。考えは転生するの方へ向かっていった。

「あの、転生先はどの世界でもいいんですね？」

「はい、お望みならば漫画でもアニメでも小説でもOKですよ。」

そういわれるとどこに行くか悩みたくなる。ヒーロー系を選んで自分がそれになるか、ギャルゲーの世界にいつてリア充気分を満喫するか。どうすればいいか迷いどころである。

「ギャルゲーの世界はどうですか？」

とりあえずこの世界を選んだ。ここにいけば何人もの女から本命を選ぶことができる。友達だって可愛い子ぞろい。こんな贅沢なこと

ほかにない！

「たとえばどの世界ですか？」

「アマ。ミとかはどうですか？」

彼女は渋い顔になった。

「それは難しいですね。それは最近アニメ化されたでしょ。だから転生者が大勢いて、困ってるんですよ。」

先を越されたか。まあいい、そんなこと誰だって思いつくこと。それにまだまだ候補はある。落ち着け。

「ではけい。ん！は？」

「それはよりむずかしいでしょう。最近ブームになったでしょう。そのため席が余るまで天国で時間を潰している人もいるくらいなんですよ。」

そうか。そういえば俺の学校でもアンチオタクの奴らが唯は俺の嫁！とか言ってたしな。しょうがないか。俺はため息ひとつついた。

ほかにも様々なアニメを上げたがほとんど満席状態で入れる枠がなかった。もうほとんどネタがない。どうしようか頭をもたげていた。その時だった。あるライトノベル原作のアニメが浮かんた。

「では、『ゼロの使い魔』はどうですか？」

「それなら大丈夫ですよ。枠を多く取っておりますので。」

彼女もほっとした様子である。

ゼロの使い魔を思いついた理由としては2次創作が多いジャンルだと自分で勝手に決め付けていたからである。友達にはその世界に近代兵器をブチ込んだり、世界を変えたりしているものもいると聞いている。それなら自分も同じようにできるのではないかと思ったのだ。

「よかった。ではゼロの使い魔をお願いします。」

「わかりました。オプションやご要望はありますか？」

「主人公はチートですべての系統のスクウェアでさらに時間を止める力を持っている。」

彼女は一旦難しそうな顔をしたがそのあとこっちを見ていった。

「わかりました。このご要望でやりましょう。」

彼女は笑った。俺もつられて笑う。まさか自分の人生のスタートを自分で決められるとは思いもしなかったからだ。

「ありがとうございます。」

「いいえ、こんなことしかできませんが力になれてよかったです。」

「あと一つだけ言いたいことがあります。」

彼女は一呼吸置いていった。

「なんですか？」

「再び送る人生、決して後悔しないような人生を送ってください。」

彼女はあの天使のような笑みを浮かべていった。同時に俺の周りを眩いばかりの光が包んだ。それはまるで太陽のようだった。意識が遠ざかっていく。そのさなか俺はあることを思った。

彼女は俺にチャンスを与えてくれた天使なんだ。

転生（後書き）

作者です。わけあって1話を書き直しました。

ご感想、ご意見、ご批判をお待ちしています。

旅立ち

「転生するからには悔いのない一生を送ってください。」

その言葉を聞いてから17年の歳月が流れた。

俺はブリタニア連邦王国のバレンタイン伯爵家の三男アーサーバレンタインに生まれ変わった。

バレンタイン伯爵家は5995年のブリタニア独立戦争を主導したハロルド・バレンタインを始祖とする一族である。

6003年の独立戦争後戦いを勝利に導いたハロルドはブリタニア王国（建国当初の国名）国王から伯爵の地位を授かり初代首相に就任した。

以来バレンタイン伯爵家はブリタニアの政財軍界に代々有能な人材を輩出している名門貴族となっている。そのため王家ウィンドー家とバレンタイン家は代々密接な関係にある。

俺の父親ロバートはこのことをとても誇りに思っていて口癖はいつもこうだ。

「男は国家のためになる人間にならねければいかん。」

もちろん俺にも政治家か軍人になることを切望している。

父は最近閣議やらなにやらでとても忙しいらしく議会で寝泊まりする機会が多い。最近、約上に位置する国アルビオンで不穏な動きがあり、今後の外交方針についての閣議に追われているようだ。ブリタニアは大英帝国をモデルとしていて議院内閣制、立憲君主制が採用されている。

そんな父が久しぶりに家に帰ってきて、一緒に夕食を摂ることになった。以前にも話した通りバレンティン家はお堅い職業の人間ばかりが集まっているが、食卓の時はごく普通のどこにでもいる平凡な家族なのである。

「最近良くないニュースばかり耳にする。」

ロバートはため息をついて言った。

「なにかあったのですか？」

母レイラはそんな父の顔を見て聞いた。

「アルビオンの王政府が倒れた。それによってアルビオン政府の閣僚は全員安否不明。国王や皇太子も行方不明だ。」

「アルビオンは今どうなっているのですか？」

話に横やりを入れたのは長兄のアーノルドだった。

「現在は王党派を倒した貴族たちが暫定政府を樹立しているが、正確には無政府状態だ。」

「アルビオンはここに攻めてくるでしょうか？」

レイラは来るかわからない貴族政府の脅威に怯えるように言った。ブリタニアはアルビオンの下側に位置するため攻めてくる可能性が高いのだ。さらに30年前の戦争で我が国に敗れている。その報復に可能性だってあるのだ。

「そこまではわかっていない。しかし、わかっているのはその貴族たちが正式な政府を樹立することだけだ。」

「そうしたら我らはどうするのでしょうか？」

「一国で立ち向かうことは無理かもしれない。そのため昨日の閣議で孤立主義から協調主義に外交方針を転換することが決定された。しかし、まともに付き合っていたのがガリアとアルビオンだけだからな。政策は難航するかもしれない。」

ガリア王国は前大戦では中立を堅持し戦争終結に尽力した国家だ。それに6003年の独立の際には真っ先にブリタニアを国家承認した国でもあるのだ。一様帝政ゲルマニアとも関係はあるが前大戦の際の領土分割で揉めていて関係がギクシャクしている。

「そのために俺がトリステインに留学するんだね。」

アーサーが父の顔を見ていう。

「そうだ。お前はトリステインに外交官兼留学生として赴き、大戦以来冷え切ってしまったかの国と国交を結ぶために尽力してもらいたい。」

前大戦ではブリタニアとトリステインは敵同士だった。我が国は戦後敵国との関係を修復していない。特にトリステインとはクルデンホルフ大公国におけるブリタニア軍駐留をめぐって関係が悪化していたのだ。

「わかったよ。これも我が国のためだからね。」

俺はにこつとほほ笑みかける。そんな息子を父はすまなそうな目で
見ている。

「実の息子にこんな大役を押し付けることは本当に申し訳ないと思
っている。」

「いいよ、別にそれにあつちの方が料理はうまいと思うし。」

すまなそうにしている父親に心配をかけないようにおどける。実際
しょうがないことである。我が国がクルデンホルフ及びハルケギニ
アに行くのを容易にするためにはラ・ロシエールを通ることが必要
なのだ。

「ははっ、そうか。それなら任せても安心だな。体には注意するの
だぞ。」

「わかってるよ。俺だって子供じゃないんだから。」

「じゃあ俺はもう寝るね。明日早いから。」

俺は席から立ち上がるとこの場を離れようとした。しかし、父はそれを制する。

「待ってくれ。念のためにこれを渡しておこう。」

父はあるものを取り出した。それはモーゼルC96であった。第一次大戦からドイツで使われている本銃は歴史上の偉大な人物や中国の馬賊でも使われているポピュラーなものである。アーサーはこれに見覚えがあった。前世ではバイオハザードシリーズをすべてプレイ済みであつたため名前くらいは知っていた。

確かこれは最大強化するとショットガン並みの威力になった気が……。

つい前世のことを思い出してしまった。

「どうしてこんなものを持っているのですか？」

「私が若いころ、ゲルマニアに行ったときに現地で仲良くなった士官がくれたんだ。」

アーサーは銃を受け取る。そして右手を回しながら舐めるようにして見つめた。

「気に入ったかい？長い道なりになるかもしれないが頑張ってくれ。」

旅立ち（後書き）

2話終了。

一旦不手際のため書き直しました。

ラ・ロシエールにて 次期ブリタニア王国女王はあのキャラ！？

早朝始発の船に乗り、アーサーはトリステイン王国港町ラ・ロシエールに着いた。アルビオン王国や我が国に向かう入り口であるここはオールシーズン商人や旅人でにぎわっている。それは早朝だろうと変わらない。大通りを歩けば動く壁によって前方をふさがれてしまいうくらいだ。

街には土系統のスクウェアメイジによって溪谷を掘って作られた建物が大通りをはさむようにして並んでいる。そこでは商人たちが旅先で仕入れた骨董品や森で取れたみずみずしい果物売りさばいている。そのほかにも絶賛内戦中のアルビオン王国から主人に見限りをつけて帰っていった傭兵たちも闊歩していて、老若貴賤問わずである。

そこにひっそりと2つの石が立てられている。ひとつはきちんと磨かれ固定化の魔法をかけてある墓石のような石ともうひとつ形は一緒だが色が黒ずんでおりひびも入っているみずばらしい石が立っている。これは先の大戦での戦没者慰霊碑である。輝きを主張しているのがトリステイン軍の戦死者慰霊碑であり、しょぼくれているのはブリタニア連邦軍戦死者慰霊碑である。まるでブリタニアトリステイン間の関係を表しているようだった。

このときアーサーは2つの慰霊碑が互いに主張し合えるような関係が必要だと改めて思わせられた。そんな話はさておき、今俺は待ち合わせ場所を探しながら首振り人

形のごとくあたりを見回している。父の話によればラ・ロシエールの喫茶店に行けば、迎えのハリファックス卿ともう一人の留学生が来ていくれると聞いていた。

ハリファックス卿とは父の海軍時代からの友人であり現在は外交官である。趣味は骨董品集めでよく父や俺に異国からの壺や絵画などを持ってきてくれる。(ただし値打ちものかといわれるとそうでもない。)そのため俺も幼いころからよく知っている。今は在トリステインブリタニア公使でありアーサーの父親代わりになる人物である。

その彼が来てくれるというのだが待ち合わせ場所である喫茶店がなかなか見つからない。実際早く喫茶店に入りたいのだ。全身にダンベルを背負っているからだ。自分は今『どこぞのベトナム帰還兵ですか?』といわれてもおかしくないくらいの重装備なのだ。

後ろにはリーエンフィールドMk?、ステン短機関Mk?とハリファックス卿から譲り受けた風系統限定の名刀『フウジン』を備え、ホルスターにはM92F(バイオハザードシリーズでS・T・A・R・S隊員が使用していたやつ)とマグナムコルトパイソン(バイオハザード無印から)をつけている。

もはや歩く武器庫である。中でもM92Fは俺の6歳年上の姉から譲り受けたものだ。姉はスコットランドヤードの特殊部隊S・T・A・R・Sの隊員をしていて、小さい頃はよく取っ組み合いをして泣かされたものだ。最近ではブリタニア北部で起きた人食い病の鎮

圧任務を請け負っていて家に姿を現さない。そこで追跡者という大物を対峙したと自慢げな手紙をよこしてきた。

そんな大物と怪物の中で育った俺は自分でもなんであるが強い人間だと思っっている。何が起きてもおやつの時間と同じ気分にいれるだろう。

そんなことを考えているうちに目標の喫茶店らしき場所にたどり着いた。そこはこじんまりとした形でまるでフォークソングなどでモデルにされるような喫茶店だった。まだ誰も来ていないので席を取っておこうと思い、街の景色がよく見える端側の席に陣を取った。

そのあと時間をつぶそうと思い、スコーンと紅茶を注文する。英国では早朝や寝る前の紅茶は当たり前のようである。

「ごめん、ごめん。アーサー君。待たせたかい？」

入り口側からやせ型で滝のような汗を流した50代くらいの中年男性がマラソン後の選手のように入って来た。この人こそハリファックス卿である。

「おそいですよ。退屈で死にそうでした。」

アーサーは笑っておどける。ハリファックス卿は滝のような汗を拭きとりながらこっちによってくる。

「車を止める場所が見つからなくてね。探し回っていたらこんなになっちゃって。」

汗を拭きとるとすまなそうな顔をして言う。トリステインの人々はブリタニアの馬なし馬車をよく思っていない。なぜならエンジンをかけるときの大きな音で馬がビビって暴れだしてしまうからだ。馬やトリステインの人々にはエンジン音は怪獣の鳴き声のように聞こえるようだ。そのため自動車は敬遠されている。

「あれ？もう一人はどうしたのですか？」

留学生は俺を含め2人のはずだ。だがハリファックス卿以外の人物は影も形もない。
俺は首をひねる。

「ああ、もう一人の子ね。もうすぐで来ると思うよ。」

するとそれが合図だったかのようにもう一人の客が入って来た。それはアーサーがなじみのある人物だった。

その子はアーサーの足腰部分の身長に地面につきそうなくらい長い髪、エメラルドグリーン瞳にフリルの服をまとったまるでビスクドールのような美少女だった。

「やはり君か。まあ彫刻のような従者よりは見飽きた人間の方がましだな。」

対面早々、針のような言葉を俺に吐きかけたのは幼馴染で次期女王のヴィクトリカ王女だった。彼女について少し説明しよう。本名ヴィクトリカ・ウィンドー、現ブリタニア連邦王国国王アルバート6世の娘である。バレンタイン家とウィンドー家は建国から深い関係にあり、俺は彼女の遊び相手だった。

「久しぶりだね。2年くらい前かな？最後にあったのは。」

俺は彼女の方に視線を向けると昔遊んだおもちゃを見たかのように言う。ヴィクトリカは2年前帝政天ツ上という国に社会勉強のため留学していたのだ。

「そうだな。全く父上の考えはよくわからん。一年くらい天ツ上に行けと言われたと思ったら、今度はこっちに戻って缶詰生活を送れというのだから複雑怪奇だよ。」

ヴィクトリカは遠い目をして持っていたパイプを一回吸った。本当

は3年くらいの天ツ上留学を予定していたのだが、昨年ウインの月に前王エドワード6世が崩御したことによって本国に戻されたのだ。その後は王位継承権第1位の人物として王宮に1年幽閉されていたのだ。この国では後継者を失った王は退位をせざるおえなくなってしまうというルールがある。そのため彼女は国王陛下にとっては命と同じくらい大事な存在なのだ。

ちなみにこの話は民衆には全く知られていない。これはすべて父が仕入れてきた話である。だが彼女はそれを知らないと思っているらしくわざと毒のある言葉で言っているのだ。

「本当ですね。陛下はウィンドー公時代から面白いお方でした。しかし聡明な方です。今回の件も何か考えがあるのではないかと思えます。」

なるべくこの話は深く掘り下げないように話を徐々にそらそうとした。だがそうしようとするどこかしらボロが出てしまう。それがアーサーの欠点だった。ヴィクトリカは賢いのでそれを見破ったのか含み笑いをして、

「そうかもな。あの父上だ面白いことでもあるのかもな。」といった。

その光景を子を見守る父親のように見ていたハリファックス卿は、

「よかったよ。やっぱり昔から顔なじみの2人がそろつとこつちもやりやすいからね。」といった。

「ところでそろそろここを後にしないか？早く行つて留学先を知つておく必要があるだろう。」

ハリファックス卿はあたりの目を気にするような感じで退場を促した。俺はそのあとレジで勘定しハリファックス卿の自動車に乗り込み、留学先トリステイン魔法学院へ向けて足を動かした。

ラ・ロシエールにて 次期ブリタニア王国女王はあのキャラ！？（後書き）

感想、意見をお待ちしています。

ブリタニア史〜ウィンドー公とデューダー公の争いとブリタニア独立戦争〜

およそ6240年前始祖ブリミルはこのハルケギニアの地に降臨し、その地で4人の子供を産んだ。その子たちは広大なハルケギニアの地にトリステイン、ガリア、アルビオン、ロマリアの4王国を立て国王を名乗り、王族はブリミルの血縁関係にある。この話は様々な文献をもとに歴史学者たちが解釈していたものであつて本当のことは不明であるが、第2次ハルケギニア動乱（6243〜6245）まで各国の王たちは絶対王政を行う根拠に用いていた。のちの王権神授説である。

アルビオンも同じである。初代アルビオン王アーサー（生没年不明）はブリミル4番目の子供であるといわれている。そしてその子孫ジョン1世（5918〜6003：在位5923〜6003）は説をもとに絶対君主としてアルビオンに君臨していた。5990年代絶頂期に入り民や植民地の人間は王のもとで砂漠で遭難したような苦しみを味わっていた。5995年本国貴族による植民地人の虐殺事件が発生、ついに怒りがピークに達した。そして同年本国軍と植民地軍が衝突し、8年にわたるブリタニア独立戦争がおきたのだ。しかし、この戦いは簡単にいえば大人と子供の戦いであり植民地軍が圧倒的に不利だった。

ではなぜ植民地人は独立を達成することができたのだろうか？

それはジョン1世の子供による謀反によるものだった。彼には2人の子供がいた。兄のアレックス（5953〜6012）と弟のジョ

ンソン（5961～6026）である。この2人はそれぞれ称号を持っていた。

兄はprince of Wales（次期国王に与えられる称号）弟はウィンドーブリタニア公（植民地ブリタニアを統治している人物に与えられる称号）である。しかしウィンドーブリタニア公はprince of Walesとは違い、特にこれといった権限がなく名ばかり職なのだ。（兄はデューダー公と呼ばれる場合もある）

弟ジョンソンはこれに不満があったのだ。彼はとても野心旺盛な人物であり、次期国王の座に宝石のような魅力を感じていた。そこで兄アレックスの称号をはく奪しようとは画策し、独立戦争では植民地軍に加わったのだ。

この行動の理由には諸説が存在し、ジョンソンは王族が植民地軍に加わることによって民衆に不信感をあおらせ父王ジョン1世を退位させ、自分を王とした独立国家を作ろうとした。または彼にはこの戦争に勝つ自信があつて父王と兄のアレックス両方を殺してし、2つの大陸ともに自分の統治下に置こうとした、さらには王族への不信感を抱かせるのを阻止すべくジョン1世が兄からprince of Walesの称号をはく奪させるのを狙った行動だともいわれている。

この謀反により84歳だったジョン1世は健康を害し、重臣ウォルポール伯爵（5946～6016）はジョンソンをブリタニア王として即位させ独立させるという妥協案で危機を乗り切ろうとした。

ジョンソンはこれを断っていたが度重なる説得に折れてブリタニア王として即位することを了承した。

そして6003年植民地軍総司令官ロバート・バレンタインはジョン1世の弟ジョンソンを国王として迎えることに同意し、アルビオン政府はその見返りとして新国家ブリタニア王国の独立を承認した。かくして、ここにジョンソンことジョージ1世を始祖としたウィンドー朝が開かれたのだった。

その代わりにブリタニア王国はアルビオン政府の提示した『継承の掟』を飲まざるおえなくなった。これはアルビオンがブリタニアを直ぐに併合できるように取り決めたものである。内容としては『ブリタニア王家はその血筋を絶ってはならない。もし絶たれてしまった場合には即座に我が国の領土として編入されるものとする』というものである。しかしこれには続きがあつて『もし逆の場合がおきても同じようにしなければならない。』とも書かれている。これはアルビオンがブリタニアは大したことない国ですぐに滅びるとたかをくくっていたため付け加えられたのではないかといわれている。

アレン・アレクサンダー著『ブリタニア史 1章ブリタニア独立戦争とアルビオン王家』

ブリタニア史〜ウィンドー公とデューダー公の争いとブリタニア独立戦争〜（後

ご感想、ご意見お待ちしております。

トリステイン魔法学院

ラ・ロシエールでなじみ深い王女と再会を果たす。それと同時に留学の同志も見つけることができた。そこで俺らは1日早いが留学先トリステイン魔法学院の宿舎に入ることにした。

俺はまずはじめに学長であるオールド・オスマンのところを訪れた。

「はじめまして、明日からお世話になるアーサー・バレンタインと妹のヴィクトリカです。」

椅子に座っている学長に対し、俺は恭しく挨拶をする。ちなみに彼女が王族というのは厳秘にされている。それを知ってしまうと命の危機に晒されるからだ。

オスマンは椅子から重そうに体を上げて、

「ほう、君がブリタニアから来た留学生か。なかなか凛々しい顔をしておる。」といった。

アーサーは体こそはセメントで固めたようにカチコチであったが内心はほっとしていた。30年前の大戦で2国間の関係は冷めきって

いて、我らを憎んでいる人間だって少なくない。もしここで『帰れっ！』などといわれてしまっただけは居たたまれない気持ちになっちゃう。そう考えると心臓が口から飛び出してしまいそうだった。

「そんなに固まることではない。わしらは昔のこととやかくは言わん。」

オスマンはまるで自分の心の内を透かして見ていたような口ぶりだ。この言葉が決定的となり俺の体は肩の骨を抜かれたかのようにほぐれた。

「ありがとうございます。そういつただけければ幸いです。」

「では自分はこれで失礼します。まだやっていないことがありますので。」

俺は右に半円を描くように踵を返そうとする。しかしそれをオスマンは制止させた。彼は少し笑ってこういった。

「隠さなくてもよいのじゃぞ、わしは秘密を握って脅迫したりはせん。」

この老人侮れない。

俺にはオスマンの笑みは賢者または勝者の笑みのように見えた。だがしかし、最初の印象はよかったみたいだ。学長室を後にすると自分も少し笑っていることに気付いた。

そして翌日、自分は魔法学院の2年生として正式に編入された。まず2年が行うのはサモン・サーヴァント（使い魔召喚）である。これは召喚者の属性を固定化する儀式であり、互いにパートナーとしての契りを結ぶのだ。だが自分はすでに本国でやっているため蚊帳の外の話になっている。

ここで俺の使い魔を紹介しよう。そいつは今自分の足元に円を描くようにしてうろついている。正体は羽猫^{はねねこ}のモギーである。トラのような図体に白い毛並みに、ビー玉のような目、長く筆先のような尾そしてペガサスのような翼それが羽猫の特徴だ。こいつは韻竜とかグリフォンのように人を乗せることができない。それなので主に荷物運び（例えば宅急便）のような仕事をしていることが多い。さらに羽猫は目がよく聞いため、軍人の使い魔になることもある。

そんなメイジのカルマを達成するべく今こうして外に出ている。周りの生徒はみんなまだ見ぬパートナーのことを想像して楽園に行くような気持ちでいる。女子勢は可愛い系の使い魔を、男子はカッコいい系の使い魔を所望する。どこの時代でも世界でも男子と女子の考えることは同じだ。

そんな花より団子な人たちがいるにもかかわらず2人だけ花より団子ではなく団子より花な奴らがいた。
ヴィクトリカと桃色の髪をした少女である。

「あら、あなたは例の留学生さんじゃないかしら。こんなところに何をしに来たのかしら？」

桃色の髪で鳶色の瞳をもつルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールはヴィクトリカに対しゴキブリを見るような目をして見る。

「留学だよ。それ以外に何しに来る？そんなことも分からないのかね？君は。」

ヴィクトリカは少し笑みを見せると間違いを正す教師のように言った。ルイズはそれにまゆをピクンツとさせたが持ち前の釘宮ボイスで、

「技能知識共にゼロのあなたたちに魔法学院の内容が理解できるかしら？」

「ゼロは君の能力のほうだろ？自嘲しているのかゼロのルイズ？それに技能知能ゼロの集まりになぜ30年前負けたのだ？君たちは1なのか？」

ヴィクトリカはいまだに余裕の表情でパイプを吸う。まるで口論を楽しんでいるようだ。それを見たルイズは神経を逆なでされ咆哮を上げる。

「黙りなさいっ！野蛮なブリタニア人！ここで30年前の罪を払わせてあげるわっ！」

ルイズは鬼のような形相をして杖を抜く。

「やめたまえ、君では私を倒せんよ。杖を置きたまえ。」

ヴィクトリカは杖を抜こうともせず持っていたマカロンを口に入れた。もはや言葉のドッジボールであった。これ以上続けたらハルケギニアが滅亡するまでやるだろうと考え俺は対峙する2人の間に入った。

「お前らやめろよ。少しはここで断罪したってしょうがないだろ。」

「うつさいわね！ブリタニア人Bは黙ってなさい。」

ルイズは俺を睡眠中自分の周りを飛ぶ蚊に言うように言った。

「おい、お前人のことをゲームのNPCみたいに……。」

「こらっ！君たち。喧嘩はやめなさい。」

俺の言い分は遮られてしまった。それは魔法学院の教師コルベールによるものだった。彼はこのライブ会場を葬式場に変えると、授業の説明を始めた。

コルベールは説明をし終えると、周りの生徒は説明に従いサモン・サーヴァントを始めた。

地球 日本 東京都千代田区秋葉原

電気製品の宝庫でありオタクの聖地であるここは様々な人でにぎわっていた。周りにはアニメキャラに扮した少女、メイド服姿の少女そしてリュックを背負ったこぶとりまたはナナフシのような男性、ゴスロリファッションの少女が年齢、容姿問わず闊歩していた。

少年もそこに溶け込んでいた。修理したばかりのノートパソコンをラグビーボールのように抱え、帰宅後に始める新たな出会いに期待を寄せていた。

「やつほー！家へ帰れば素敵な出会いが待っている！」

少年平賀才人は今表現できる限りの気持ちを声にした。彼女いない歴〃年齢だった才人は出会い系サイトに登録しバラ色の人生を思い描いていた。

すでに未来予想図はできている。あとはどうやってそれを実行するかだけだ。

才人は設計図を考えることで頭がいっぱいだった。もはや周りにいる人や喧騒は脳の前でかき消されているといった感じだ。

するとそこに鏡が現れた。鏡は光り輝くダイヤのようなもので支える土台のようなものは存在せず、宙に浮いているような感じである。

「なんだよこれ？」

才人は突然現れた鏡のような物体に首をかしげた。

なんの自然現象か？それとも地球外生物か？

鏡のような物体に興味を抱いた。それはいつしか触れてみたいという気持ちになった。俺は気がつくとその手に手を伸ばしていた。まるで初めてのものに触れる赤子のように。

それは一瞬の事だった。鏡に手を伸ばすと俺の体は掃除機に吸われるごみのように吸い込まれていった。何がおきたのかも考える余裕さえなかった。

「あんた誰よ？」

スズのような声で起こされた。俺は体を重そうに起こす。そこには雲ひとつない空にマントのようなものをまとった16・7歳の男女と桃色の髪の少女が周りに立っていた。秋葉原とは対照的なところだった。

こうしてのちにハルケギニア史の変化に大きく貢献する2人はであった。

トリスティン魔法学院（後書き）

感想、ご意見お待ちしております。

彼は使い魔　才人とアーサーのファーストコンタクト1

少年の名は平賀才人。俺と同じ地球からきた日本人だ。彼の話によればここには不思議な鏡をくぐって来たらしい。俺とは来た場所こそは同じだがシチュエーションが違う。

まあ、自分は望んでこの世界に来たため世界観に理解はある。だがしかし才人にその免疫はない。あまりにも突然のことで困惑したり、価値観を理解できないことがある。

そして今日その現代人の価値観と中世人の価値観の葛藤により事件を起こしてしまった。

食堂にて才人が主人であるルイズと朝食を取ろうとしていたところ、ある小瓶を見つけた。それはギーシュ・ド・グラモンという男のものだった。彼には恋人がいて小瓶はその人のものだった。しかし両手に花だった。才人は親切にも小瓶をギーシュのもとに渡した。がそれがもとになって2股がばれてしまったのだ。

これが今回の騒動の原因だ。才人の行為に対してギーシュは配慮が足りないと言句をつけた。それを「恩を仇で返された」と思った才人はギーシュに嫌味を言った。するとギーシュは礼儀を教えることを名目に決闘を申し込んできた。彼の容姿や体型を見た才人は「こんなひよろつちい奴、楽勝。」と考え決闘を受け入れた。

ところかわってトリステイン魔法学院　ヴェストリの広場

ここが今回の決闘場である。周りには面白いもの見たさに多くの生徒が集まり、ワイワイガヤガヤやっている。その中にはいろいろな人たちがいる。食堂から持ってきたパンを咀嚼して試合を待つ者、

「おい、どっちが勝つと思うか？」

「90%ギーシュだろ。誰も負けに行く奴はいない。」

「なら俺はあえて平民の方へかけよう。もしもに期待して。」

といった競馬場や競艇で見えそうなことをしている者もいる。様々な人がめつたにない事件に様々な思いを乗せて決闘場にいた。

そんな中、対戦相手である才人が姿を現した。聴衆は何かに勧められたかのように歓声を上げる。ギーシュは来るまでバラの造形がついた杖をいじっていた。そしてついたらと聞くと才人の方を見る。2人は聴衆の円に囲まれ、その中心で対峙している状態になっている。

「待っていたよ。逃げないで来たことはほめてやろうじゃないか。」

それは悪役が主人公に言うような口調だった。

「誰が逃げるかよ。」

「さて、では始めるか。」

ギーシュは自分の杖を高々とふりあげる。それが試合の合図だ。

「先手必勝っ！」

才人はそれと同時にかけだすと狙いを定めたこぶしを振り上げた。
ギーシュとの距離は10歩ほど。

一発でケリをつけてやる！

こぶしがギーシュの端正な鼻めがけて飛ぶ。しかしギーシュは余裕の笑みを見せて、杖をふる。すると才人の目のまえに自分と同じくらしいゴーレムが現れた。それはまるで騎士の姿をした女性のように、そいつは才人の周りに円を作るようにして囲む。

「おい、卑怯だぞ。」

「僕はメイジだ。自分の魔法を使って何がわるい？」

「て、てめえ……。」

「言い忘れていたな。僕の二つ名は青銅のギーシュ。よって青銅のゴーレム『ワルキューレ』が相手をする。」

ギーシュは恭しく言った。すると一体の青銅のゴーレムが才人に向かって突進してくる。そして才人の腹めがけ右腕を送りつける。

「ぐはっ！」

才人は殴られたショックでその場に倒れこむ。それと同時に胃の中のものごとこみあげてくる感じがしてくる。

やっこの思いで立ちあがりゴーレムめがけ『倍返しだっ！』と言わんばかりの一発をかまそうとする。しかし後ろに控えていたゴーレムが背中を蹴り、前方のゴーレムが才人の左ほほに右ストレートを入れる。

背中を弓で射ぬかれたような痛みと顎が顔から外れんばかりのストレートを食らった才人は緑の草原にダイレクトキスとした。

それでも才人は立ち上がろうとする。だが、それを左右にいたゴーレムが両腕を力いっぱい踏み制止させる。それによって両腕からは今まで聞いたことのない鈍い音が聞こえてくる。腕の骨が折れたのだ。

「なんだい、もう終わりがい？」

ギーシュはこれは小手調べだと言いたそうにしている。才人は正常さを示そうと立ち上がるが、体はすでに使い古した布のようだった。立ち上がろうとするが腕に力が入らない。

そこにルイズと碧髪碧眼のメイジと地面につきそうな金髪にエメラルド・グリーンの瞳、フリルをまとった少女が現れた。

「サイトツ！もうやめて、あなたはよく頑張ったわ。終わりにして！」

ルイズは立ち上がろうとオットセイのようにしている才人に対して言った。その声は半泣きのような声になっていて、鳶色の瞳は涙にぬれていた。残りの2人は才人に杖を向けて何やら呪文のようなものを唱えている。

「やだね。ここで引き下がるなんざできねえ。」

「サイトツ！わかったでしょ？平民はメイジには勝てないのよ。」

「彼女の言うとおりだ。それに傷だって深い、ほっといたら死ぬぞ。」

「

ルイズと碧髪碧眼のメイジは才人を引き留めようとする。それを振り切って齒を食いしばって太古の巨大兵器のようにふらふらと立ちあがった。

「俺はもう地球には帰れない。ならこの世界で生きていく。」

幽霊のように揺れていたが停止すると、ルイズの方を見て力強く言った。

「お前の掃除だつてする。下着だって洗う。なんだつてするさ。でもな……。」

才人は気をためるかのように黙る。

「でもな、下げられない頭は下げられないんだよっ！」

まるで今までたまっていたものを放出するかのように言った。碧髪碧眼のメイジはその発言に突き動かされたかのようにこっちへ来た。

「君の考えはよくわかった。ならこれを取れ。そして戦え。」

メイジは左にあるホルスターから銃を抜いて渡した。彼は才人に対して使命を託すかのような目をしていた。

「これは……………」

それはエンフィールド？2だった。第2次世界大戦でイギリス陸軍の正式銃となったこれはリボルバー式の銃である。それを取ると才人の左手の甲が光り始めた。すると今まで低く唸るぐらいの痛みが一気に消えた。

才人は驚愕する。すさまじい痛みが消え、さらには体が軽くなったのだ。それは羽のようでジャンプすれば空高く跳べそうな勢いだ。

いけるっ……………！

ハンマーを引くと前方ゴーレムめがけ引き金を引く。弾丸はゴーレムにあたり、青銅の花火を打ち上げる。次は右にいたゴーレムに、さらには左のゴーレムに、一体、一体また一体とギーシュのゴーレムはきれいな花火を打ち上げる。

自分があれまで苦戦していたのがウソのようだった。快調だった。

一方のギーシュはリズムよく倒されるゴーレムを見て青ざめていた。今までとは違って一体も才人の体に触れることなく粉々になっていくさまが目には焼き付けられた。

あんなやつ見たことない！！

そんなこと言っているうちにゴーレムは全滅し、才人はこっちに向かって突進してくる。あまりの恐ろしさに杖をふることさえ忘れてしまった。

才人はギーシュの1歩手前まで来ると、顎に銃を突きつけた。才人は『これでもやるか？』と言わんばかりの目をしている。

「ま、参ったよ……………」

ギーシュはその場に情けなくへたり込んだ。どうやら勝敗はついた

よう
だ。

彼は使い魔 才人とアーサーのファーストコンタクト1（後書き）

感想、ご意見お待ちしております。

彼は使い魔　才人とアーサーのファーストコンタクト2

才人は目を覚ました。そこはルイズの部屋だった。ベットの近くのテーブルにはパンや飲み水が置かれている。

次に体を見た。そこには包帯が巻きつけられていた。その経緯の系をたどる。

そうだ。俺はあのギーシュと決闘してて……。

ボロボロになってたら、銃を渡されて……。

逆転して、気絶したんだ。

上半身を起こすと、あたりを見渡した。誰一人としていない。空気を張り詰めたかのように静まりかえっている。

「なんだよあいつ。使い魔が大変な時に置いていくなんて。」

いない主人に対して、窓の方を向いて小声で言った。

さっきはあんなに泣いてわめいて心配したくせに……。今度は放置かよ。

才人は呆れたように言った。

そのときだった。コンコンと乾いた音がドアに、次に男の音が響いた。

「入るぞ。いいか？」

落ち着いている声だった。ギーシュとの決闘の際に銃を渡した男の声に似ていた。

「ああ、開いてるよ。」

才人が言った。ドアが開き、外から一人の男が現れた。身長が170後半くらいでブルーの瞳に頭髪、端正な顔立ちの上品さを感じられる好青年だった。

青年はつかつかと俺の方へ近づいてくる。

「いやゝよかったよ。死んじゃったらどうしようかと思って。」

愛想良く笑いながら言った。才人はほつとした。結構いいやつそうじゃん。容姿から見て冷酷そうな感じがしたが。少し親近感がわいた。

その青年はアーサー・バレンタインといって、ブリタニア連邦王国という国から妹とともに語学留学で来たと言った。その妹というのがあるとき一緒にいた金髪の少女でヴィクトリカという名前らしい。

俺らはしばらく話し合った。ハルケギニアの情勢やアーサーの祖国について、さらには自分の生まれた日本について。アーサーは俺が話をするとよいタイミングで相槌を入れ、ふざけて言うと言を上げて笑った。まるで同級生と話しているような気分だった。しばらく話していると話題は銃のことに切り替わった。

「お、そうだ。これありがとな。」

「なに感謝されることはないさ。同じ者としてするべきことをしたまでだ。」

アーサーは親友に話をするかのようにだった。その言葉に才人は首をかしげた。決して嫌味を言われたわけではない。何か引かかるニユアンスだった。

「どういう意味だ？」

才人は重々しい口調で言った。まるでラスボスに真実を告げられた主人公のように。アーサーはえつとした顔つきになり拍子抜けしたかのようにだった。

「知らなかったの？君のことだからすでに気付いてると思ったのに。」

「どこにそんな不宣があった！？」

まるで漫才でのツッコミ役のように切り返す。そしてアーサーの顔手前まで体を乗り出す。アーサーは磁石におけるSとSの関係のように遠ざける。

「さっきの日本についての時だよ。」

「そのどこに!？」

「だって知らない人が君の話に反応しないぞ。」

才人は”はっ”と思いだしたような反応を見せ、再び後ろに戻った。そう言われてみればそうだ。ルイズがいい例である。日本の事を言うとまるで好奇心旺盛な赤子のように質問してくる。それとは対照的にアーサーは日本や文化について聞いても、頷いたりおどけたりしていた。それは日本を知っている人にしかできないジェスチャーだ。

「なあ、アーサーはどこから来たんだ？名前からするとイギリスか？それともアメリカか？」

アーサーは首をふる。そのあと入って来た時と同じ冷たいまでに落ち着いた顔をした。

「俺も同じ日本から来た。だけど別次元の日本からだ。その世界には君も”いる”ぞ。」

「……………!？」

ますます意味がわからなくなった。『君もいる。』どういうことだ

？次元ごとに複数の平賀才人が存在するということか？

「でもそれは人間平賀才人ではなくライトノベル、アニメ”ゼロの使い魔”の主人公『平賀才人』としての存在だ。」

才人は『明日地球が滅びます。』と言われたかのような気持ちになった。自分が別次元ではアニメの主人公！？学校では特徴のないところが特徴の俺が！？

信じられない……………。

「まあ、俺はこの世界にあこがれて来た存在で実在しない。この『ゼロの使い魔』世界にも様々な世界が存在する。オリジナル世界のもとに星の数だけの『ゼロの使い魔』世界が存在するのだ。」

「どういうことだよ？」

才人は心霊スポットに足を踏み入れるような気持ちで言った。

つまりはこういうことだ。洋画のオリジナルにおける言語は制作国の言語である。それが上映される国に合わせて字幕がつけられ、吹き替え声優が国語で話す。こうすると一つの洋画が2つできる。オリジナルと吹き替え版だ。これが各国で行われそれが10個にも1

00個にもなる。さらに人気があればリメイクだってされる。このことで一つの洋画が星の数に増えていく。

これも同じで面白ければ、様々な人物によってリメイクがなされその人によって違ったゼロの使い魔世界が生み出される。そしてそれが星の数になる。まさに十人十色なのである。

「っていうことはこの世界もお前が生み出した『ゼロの使い魔』世界の一つなのか？」

「そうだ。俺は前世日本で死んで、この世界を作るように願った。だからここにいます。それを知ってもらえるように銃を渡した。あれには俺は転生者で君と一緒にだという意味合いも込めたんだよ。」

別世界には1人ずつ平賀才人が存在し、そこで様々な物語に沿って動いている。そのパターンは星の数で生み出す人くらいある。

才人は自分が複数存在することにぞくつとした。頭の中に大量の自分が目のまえにいるビジョンが浮かんだからだ。

「でもやっぱり、物語には終わりがあるんだろ？俺はどうなるんだ？」

才人は質問した。さっき洋画を例に話をしていたが、映画にはどれにも終わりがある。自分たちはラストシーンでどうなるのか？ルイズと結婚するのか？それとも死ぬのか？ハッピーエンドかバッドエンドか？

アーサーはその問いにクスツと笑った。そしておもむろに席を立ちあがった。

「おい、待てよ。帰るのか？教えてくれよ？」

才人はベッドから出てアーサーを引き留めようとするが、

「あいだっ！」

激痛が全力で阻止する。アーサーは帰り際に碎けたような感じでこういった。

「見に行く映画の顛末を言う人がいるか？」

彼は使い魔 才人とアーサーのファーストコンタクト2（後書き）

感想、ご意見お待ちしております。

恋の罰金バツキンガム それはダウニング街10番地なんだよね、それ一番言

思わせぶりです。

内容は真面目です。

恋の罰金バッキンガム それはダウニング街10番地なんだよね、それ一番言

アーサー達がトリステインに留学して3日目。

ブリタニア連邦王国 首都ロンドン ウェストミンスター区ダウニング街10番地にある首相官邸。ここの一室である会議が開かれていた。この部屋は豪邸の一室を彷彿とさせる作りで中心にはラグビーボールを横にしたようなテーブル。そこには首相であるヘーゼルシュタイン、外務連邦相ロバート・バレンタインを中心に蔵相、国防相、内相、運相、保健相、植民地相、統合参謀総長、陸軍参謀総長、海軍軍令総長、空軍参謀総長が座っていた。

閣僚会議議長である首相はテーブルの右端に座り、ほかの閣僚はそれを挟むようにして座っている。あたりは沈黙により重々しい空気を出している。それを最初に断ち切ったのは首相であるヘーゼルシュタインだった。彼は空咳をすると、口火を切った。

「ではみなさん。今日は明日庶民院に提出する第2次サポーター法について各々の意見を聞きたいと思います。誰か意見をどうぞ。」

第2次サポーター法というのは現在絶賛内戦中であるアルビオンで反レコンキスタ政府である”矢労連合政権”に対する物資援助することを定めた法案である。矢労連合政権とは矢十字党と労農党が合作の政権であって、2党の指導者であるアール・ブラウダーとフリッツ・カーンは元レコンキスタの人間で思想の立場から離脱してい

る。なんとしても貴族政府を承認しなくなかったヘーゼルシュタインは確実に政府転覆をはかること約束して、期限付きで2人を支援した。それが第1次サポーター法である。しかし、なかなか成果を上げない連合政権にしびれを切らしたブリタニア政府は第2次案を提出するか決めかねていたのだ。

「私はこの法案に賛成できない。彼らは大した成果を上げていないではないか。もう無駄さ、諦めて我らだけで戦おう。」

苦い顔をして言ったのは内相サムツソンである。彼は鼻から矢労政権を信じていなかった。どうせ奴らには戦闘機や銃火器は扱えない。そんな奴に支援をよこすなんて赤子に金銭を渡すのと同じだ。くらいに思っていたのだ。

「内務大臣の考えに私も賛成だ。そのようなことをして戦後処理はどうするのだ？必ず見返りを求めてくるぞ。」

無然とした顔で言ったのは大蔵大臣マクラウトだった。彼はアルビオンとの戦争は確実に起こると信じており、戦後処理は確実に行うことになるかと踏んでいた。さらに矢十字党党首フリッツ・カーンのことをウジ虫の如く嫌っていた。下品さが顔に出ていると酷評さえしていた。そんな奴のことだから戦後は欲張って政府高官の椅子を要求してくるかと考えていた。

そんな反対論が絶賛優勢中だった時に、申し訳なさそうに手を上げた男がいた。クリムナー運輸大臣だった。彼は言いにくそうな口調で言った。

「私も2人の意見と同じなのですが理由は違います。もしこのまま連合政権を支援したまま、戦争になりますと天ツ上以外の国と同盟がしにくくなると思うのですよ。ほかの国だって独自の人物を首班に立ててくるし、もし彼らが我らの支援する政府を承認しないとしたら……。」

ヘーゼルシュタインはその案にうんうんと頷いた。確かにそうだ。もし独自の首班を担ぎあげたとしてもそれは独立までの傀儡政権であり担いだ国の思うままである。ようは大人になる前の子供である。その子はその子を育てた親のものでありほかの親のものではないのだ。

「運輸大臣のいうことも間違ってはいない。戦争に突入した場合はほかの国と共闘しなければならない。友邦の意思を取り入れず自国案を述べるのは言語道断だ。すべての国が満足できる首班を担ぎあげなければならぬ。」

彼らの案をきれいにまとめたのはガーナー保健相だった。保守党の

中でも長老クラスにいるガーナーはこのことをよく知っていた。彼は数少ない第1次ハルケギニア動乱時代に議員を務めていた人物だ。

みなその発言にぐうの音も出なかった。あるものは腕組をして万事休すと言わんばかりにし、あるものは煙草に火をつけて上を向き、あるものはテーブルに人差し指を立てて音を鳴らしていた。ある程度出せる案は出しつくしていたところだった。

「みなさん、何を言っているのですか。」

誰かが声を張り上げた。音が少なくなった部屋全体に並みのように響き渡る。ある大臣はびっくりして煙草を口から離してしまっていた。

「我らは彼らに期待されているのですぞ。それにこたえなくてどうするのですか!？」

それはバレンティン外相の声だった。

「だがね、バレンティン外務大臣。我々は今までたくさんの支援をしてきたのに奴らは結果を出さんのだよ。もうそろそろ諦めないか。」

「

呆れた風にいったのはサムッソン内相である。彼はさらにまゆをしかめて外相をみる。

「当たり前だ。人間はじめてすぐに結果を出すことはできないのだ。現にこの国だってそうではないか？200年かけてここまで来たのだろうが！奴らにだってそれくらいかけてやるうとは思わんのか？！？」

赤いものを見た鬪牛のごとく激昂するバレンティン外相に対し南極の氷のような言葉を言ったのはクリムナー運輸大臣だった。

「それはそうですよ。しかしね、戦後彼らの扱いはどうするのだ？まさか放逐するとか言わんよな？」

「彼らは憂国の士です。そんな野暮なことはしません。」

「ではどうするのだね？」

バレンティン外相は冷静さを取り戻すと落ち着いたように言った。

「さつき皆様は矢労連合政権は各国の承認を得られないから無理だ。といいましたね？それなら納得できる人物を見つければいいのです。」

閣議にいた全員がきよとした顔になる。とうとう頭が煮えくりかえってしまったか……。と憐れむような顔にもなった。

「そんな葬式をするような顔をするな。この事態を収拾する人の存在を忘れている。」

「ま、まさかあのウェールズ皇太子のことか？」

「そうです。彼ならあの頑迷な2人をまとめ、さらに他国にも何の影響もなく擁立できることでしょう。」

バレンタイン外相の考えはこうだった。ハルケギニア諸国は共和制というものに強い抵抗感を示している。もし成立するとしたら矢労政権は共和制国家である。矢労政権を維持しつつ、ハルケギニア各国から苦情が来ないようにするには安否不明のウェールズ皇太子を見つけ出し、彼を元首として2人が政権を補佐する政府を樹立すれば解決できるという考えだった。

しかし、この考えにも難色を示すものがいた。特に首をひねったのは統合、陸海空の参謀総長たちだった。

「仮に外務大臣閣下が言うようにするとしたら、当然アルビオンに兵やら間諜やらを送り込まなければならない。これはどうするのですか？」

陸軍参謀総長はバレンティン外相に問う。するとバレンティン外相はにやっとして空軍参謀総長の顔を見た。

「君のところには家の息子がいる。そいつにやらせればいい。」

空軍参謀総長は驚愕した。目を大きく見開いて、口をポカーンと開けた。大臣閣下は正気か！？とさえ思えた。

「何心配することはない。心配ならわざわざ王女の護衛に行かせることはしない。だから安心するのだ。」

バレンティン外相はポカーンとしている空軍参謀総長の肩をたたいた。それを見ていたヘーゼルシュタインはバレンティン外相を見ておおっといった顔になった。

「そうだな、君の言うとおりだ。我々は少しせつかちになっていた

ようだ。君の言葉で目を覚ましたよ。」

ヘーゼルシュタインはそういうと椅子に腰をかけなおし、顔を閉めなおした。

「我々はこの第2次サポーター法を政府案として提出するものとす。異議はないか？」

誰も異議を申し立てる者はいなかった。

そして次の日、第2次サポーター法は庶民院において賛成多数で可決された。

恋の罰金バツキンガム それはダウニング街10番地なんだよね、それ一番言

ご感想、ご意見お待ちしています。

アルビオンの怪談話

アルビオン王国港湾都市ブリストル。この港湾都市はヒベルニア王国（位置はアイルランド）との貿易で30年前までは異国人や漁師などでにぎわっていた。第1次ハルケギニア動乱によりブリ天同盟を理由に参戦した帝政天ツ上によりヒルベニア王国が占領滅亡すると、それ以来貿易は途絶えてしまい頽廃の一途をたどっていた。しかしアルビオンで共和制を唱える貴族クーデターが起きると、この港湾都市はアルビオン共和国海軍が駐留する軍港として生まれ変わった。今では陽気な異邦人や漁師ではなく軍人が闊歩する重々しい都市になっていた。

「なあ、お前。こんな話聞いたことあるか？」

空を見渡すように立つ、漁師や船乗り用の簡易宿1階のロビーでカードを切っていた海兵フレデリックは目のまえにいるピーターに言う。ピーターは藪から棒であったので少し驚いたが話を続けようとする。

「どんな話だい？」

「幽霊大公の話だよ。」

ピーターはなんだよそんな話かよ、と言わんばかりの顔になって少

しまゆを吊り上げた。彼は長椅子に全身を預けた。

「まあまあ、そんなことしないで聞いてくれよ。それはな、つい数年前のことなんだ……。」

フレデリックは社長の機嫌を取る秘書のようになだめた。そのあとは自分の話を始めた。ピーターは好きにしろよ、というような顔をした。

「ここから数十リーグいったところに”シティ・オブ・サウスゴータ”って街があるだろう。そこを治めていた大公がいたんだよ。その大公は驚くほど聡明な方だったんだ。やがて、その情報が国王陛下の元へ届くところになった。陛下はたいそう大公を気に入って政府高官と同じくらいの職を与えられた。」

「ここまでは単なるサクセス・ストーリーだな。」

「いや、ここからが怖いんだよ。」

フレデリックは今までの口調とは打って変わって重々しい口調になった。まるで稲川。二が怪談話をするときのように。

「その大公は思いもがけない出世に喜んだ。しかしSとN、上と下のように喜ぶものもいれば悲しむ者もいる。そして嫉妬する者もいる。大公の出世を面白く思わない人間が現れたんだよ。」

フレデリックは言葉にさらに多くのおもりを乗せる。外は風が吹いているのか何かが転がる音が聞こえた。ピーターは知らず知らずのうちに体を起こして聞き入っていた。

「そいつらは王家に仕える古参重臣で、成り上がり的大公にプライドを踏み弄られたと思っていた。それは大公への復讐心に変貌していった。ある日重臣たちは国王陛下に密告した。」

「”あの大公は謀反を企んでおります。それを阻止するために王軍の準備を。”」

フレデリックは目のまえに国王がいるかのように恭しくした。風が強くなっているように感じる。

「陛下は裏切られたと激昂し、直ちに大公邸に王軍を差し向けた。そして大公一家を殺害し邸宅に火をつけた。こうして重臣達は密告により大公を謀殺することに成功した。」

「悲しい話だな。」

「だが、話はこれで終わりではない。そのあと不思議なことに謀殺にかかわった重臣たちが立て続けに熱病やマラリアで死んでいった。そしてあの日から宮廷では深夜人影を見た、足音を聞いたといった情報が召使いから寄せられた。もちろん深夜は誰も起きていない。」

ピーターは生温かい風を感じ、生唾を飲み込んだ。フレデリックは言葉をためるかのようにゆっくりと話し始める。

「こういった話は宮廷だけではない。大公邸跡地を深夜歩いていた農民が、森を歩いている少女の姿を目撃したといっているし、原因不明の火事だつて起きている。」

フレデリックは黙り込んだ。ピーターはその沈黙に鳥肌が立つ。いつも聞こえないような木の床がきしむ音が聞こえる。

フレデリックは単語一つを噛み砕くようにして、

「注意しろよ。深夜の暗い道、誰かが歩いているのを見ても声をか

けるな。もしかけてしまつと・・・・・・・・。。。」

”お前をつれていってやるっ！”

と絶叫した。

「「うわぁっ！！」」

ピーターは突然の咆哮で背もたれにのけぞり返った。あまりにも強大な力に長椅子が後ろに倒れそうになる。寿命が10年縮んだ・・・・・・・・と心の中で思った。

「ハハハハハハ、こんなに驚いてくれるとは。話甲斐があるってものよ。」

フレデリックはピーターの驚きぶりに満足そうに高笑いをした。ピーターはフレデリックを鬼のような形相で睨めつける。

「ハハハハハ、怒るなよ。しかもお前幽霊大公より怖いぜ。今。」

「ったく、ああくだらなかった。聞いて損したぜ！睡眠時間返せよ！」

「おいおい、聞き入ってたのはどのどいつだよ？無視してもよかつたんだぜ？」

フレデリックはいじられキャラをいじるリア充のようにいう。ピーターは記憶を思い起こして、凶星だと感じ黙り込んでしまった。その時、ドアが開いた。そこにはでっぷりとした中年男性と棒のような体系の男性が2人いた。

「お前ら交代の時間だ。もう寝ていいぞ。」

でっぷり中年は横綱のような声で言う。ピーターとフレデリックは中年に敬礼すると、自分の寝どこへ踵を返した。

「ちょっと待ってくれ。トイレに行きたい。だから先に寝ててくれ。」

ピーターは股間をおさえると、宿の外へ足を進めた。ここは宿内にトイレがなく、用をたす際には外のトイレを使用しなければならな

い。

「待て、俺も行く。それにどっかの誰かさんが幽霊にあつたら守つてやらんとな。」

「余計な御世話だよ。」

フレデリックはピーターの顔を見るとにやつと笑った。ピーターもそれと同じしぐさをしておどける。2人は宿を出て右の道に行く。しばらく歩くと港風景からうつそうと茂る森の方へ辿り着く。そこには崖がある。そこはヒベルニア王国時代にくる貿易船を監視する目的で作られた施設がある。

2人は崖にある監視施設に辿り着いた。切り立った崖に作られた施設はログハウスのような木造り家である。ベランダからは天気の良い日に向こう岸のグロスターの街が見える。軍港に変わってもこの家は変わっていない。

「ううゝ漏れる、漏れる。なんでトイレが外にあるんだよ。」

股間を抑えながら小走りをしているピーターはぼやく。フレデリックは微笑した。

「最悪の場合は俺のケツ中にシヨンベンしてもいいんだぜ？」

「それの方が最悪ですよ。何言ってるんですか？」

ピーターは時よりフレデリックのボケがわからなくなる。それは本気で言っているのかジョークなのかである。

「いいよ！来いよ！胸にかけて！（迫真）」

「何してるんですか！やめてくださいよ！（迫真）」

「ハハハハ、冗談さ。君の反応がおもしろい……。」

「フレデリック？」

彼の言葉が途絶え、姿も闇に消えた。ピーターはあたりを見回すが、時間的に墨汁をばらまいたような風景である。ほとんど、姿が見えない。

「おい、フレデリック！どこへ行ったんだよ？冗談はやめにしよう

ぜ。降参。」

ピーターは投降のポーズをすると、闇の中を見まわした。だが彼の反応はない。あるのは野性動物の声か潮の匂いの風だけだ。ピーターの背中に寒気が走り、鳥肌が二の腕を覆う。

まさかあいつ、本当に連れて行かれた？幽霊大公に？

そんなまさか。たかが作り話だろう。

でも、待てよ。じつは話自体はつくりものだけど、幽霊の話は本当だとしたら……。

ピーターのひたいから冷たい汗が流れ出る。脳内では様々な音や話し声が流れて、お祭り状態になっている。それによって逃げたいが足がすくんで動けない。

やばいっ！来る。奴はいる。近くにいます！どうすればいい？どうすれば？

ガサッ！ガサガサッ！

誰かが草を踏むような音がする。心臓が張り裂けそうなくらい鳴る。鳥肌が顔にも足にも腹にも出ているような気分になり、精神は混乱状態に陥る。

「だ、誰か！助けてくれ！だ、誰か！たすけて……………」

救いの声を上げ狂うピーターを正気に戻したのは痛みだった。一瞬こめかみに石をぶつけられたような痛みが走った。その石は自分のこめかみから頭がい骨を抜け、脳髓を砕き、後ろに抜けていった。あまりの衝撃により、彼は後ろへ倒れる。地面に倒れる刹那、アルビオンの夜空に星のようなものが光った。それは自己主張をするかのように強く輝いていた。

その星がピーターがこの世で最後に見た風景だった。彼の意識はこのアルビオンの深い暗闇のようなそこへと落ちていったのだ。

「どうだね、ほかにアルビオン兵の姿は見えるかね？同志ベーズリ
」

ピーターが撃たれたところから右側にある深い森で2人の動きを監視していた輩がいた。分隊長と言われる男は前方で双眼鏡をのぞいていたベーズリーに問う。

「いいえ、2人だけだったようです。同志分隊長。」

ベーズリーは軍人のようなキリツとした声で言った。分隊長はほつと胸をなでおろした。そして遠い目をして、顔を引き締めた。

「敵にあわててもらっては困る。」

「はい、ブリタニア政府からの支援が途絶えてから1ヶ月強です。奴らは我らを見捨てたのでしょうか!？」

ベーズリーは分隊長に詰め寄った。分隊長はそれに対し切ない顔をし、部下の目を見た。正直何も言えない。我らは腐敗した王や貴族を倒し、苦しむアルビオン人民を解放するための闘争をしている。そして勝利の暁は我ら労農党が中心となり、アルビオンの労働者や農民を中心とした平等な国家を建設する。それにはまずレコン・キスタを倒さなければならない。奴らをのさばらせておけば腐敗した貴族どもが私腹をこやすために戦争し、増税し、人民を圧迫するだろう。その魔の手から人民を救うために動いている。だがしかし、相手は魔法が使うことができる貴族。平民ばかりの労農軍は苦戦を強いられているのだ。

「いや、それは違う。無知な人間ではない限り彼らは必ず救いの手を差し伸べる。」

「ですがっ！彼らは資本主義者です。歴史背景は同じでも状況が違います！」

「歴史や主義が違えど正義は同じであろう。だから支援を受けられたのだ。正義は変わらない。変わらない限りはブリタニア政府は見捨てたりしない。」

「しかしっ！」

「しかしもへちまもあるかっ！ブリタニアの愚痴を言っている暇があったらメイジ対策の一つや二つ練ってみたらどうだね！同志ベーズリー！」

分隊長はベーズリーを怒鳴りつける。これはただ単に彼がうるさいという理由ではない。分隊長はベーズリーの答えに逃げる考えをすべて出しつくしてしまったのだ。彼らには先行きの見えない不安があるのだ。銃弾や補給などがなくなれば部下の士気にかかわることになる。

アルビオン労働党は今日も闇にまぎれて、ブリタニア政府からの支援とアルビオン人民の解放を待っている。

アルピオンの怪談話（後書き）

ご感想、ご意見お待ちしています。

アルピオンの怪談話2

「もう朝か。早いものだ。」

でっぴりとした中年男ザック少尉は宿の窓からさす光で気付いた。深夜ピーターやフレデリックと見張りを交代してから数時間たっているのだ。しかし、彼らは外に出たきり帰ってこない。なぜだろうか？

「失礼します、小隊長殿。ピーターとフレデリックを見かけませんでしたか？」

ドアを開け、敬礼を取って来たのは部下のオックスだった。彼は2人と今朝の見回りをするべく迎えに来たのだ。ザックは重たそうな肉の塊を長椅子から起こすといった。

「私にもわからん。奴らは夜中出ていったきり戻っていない。」

「どこに行ったかはお分かりになりますか？」

「おそらくトイレにでも行ったのだろっ。そこで道草食っているかもしれない。お前はそこへ行き2人を連れ戻してきてくれ。」

「イエス・サー。」

オックスは恭しく敬礼すると、回れ右をするように外へ出た。この宿にはトイレがなく、少し行った崖にある施設に行かなければならない。仕方がないのでそこまで向かいに行くことにした。

外はすでに半分太陽が昇っていて曙と言ったところである。港も本来なら漁師や異国のものが市場を開いていて陽気な女性などが朝食の材料を買いに来ているはずのだが、今回は閑散としていて共和国海軍の軍艦が重々しく並んでいるのみであり、カモメすらこの街にきて鳴こうとはしない雰囲気になっている。

「この街も変わったな……。」

オックスはそんな感傷に浸っていた。昔まだ活気があったところに一度来たことがあり諸行無常とはこのことかと感じた。そのときだった。

「なんだあれは？」

前方からこちらに向かってくる大群があった。それはまるで猛牛の群れである。しかしよく見てみるとそれは猛牛ではなく人だった。

分隊レベル約20人がオックスに向かって猪突猛進してきたのだ。彼らは銃のようなものを両手に持ち、鬼のような形相で近づいてくる。

「ウラー！」

まるで旧ソヴィエト軍のようだ。

「て、敵襲だっ！」

オックスが叫ぼうとした時は手遅れであった。彼が宿に引き返そうと背中を向けると、そこに何十回と針で刺されるような痛みが走った。うっ！とうめき声を上げその場にうつ伏せになる。人の群れはオックスが倒れていることなんかお構いなしに波のごとく宿の方へ向かって押し寄せる。

「お前、まだ生きていたのか。」

倒れているオックスのところへ男がやって来た。男はオックスの背中を見ると、まるで小動物を見るかのような声で言った。

「た、助けてくれ……！」

オックスはとぎれとぎれの意識の中で出せるだけの声を振り絞った。しかし、男の答えはこれだった。次の瞬間、何かが爆発するような音がした。刹那彼の頭ではキーンツ！という音がして意識を失った。

「これが貴様らに対する報いだ。とどめを刺しただけでもありがたい
く思え。」

男はオックスに向けたトカレフTT-33の銃口を下げた。かつて
銃口があつた先には後頭部に穴があき、血の海に浮かぶアルビオン
兵士の死体がある。男が来たときは虫の息だった。本来自分たちを
苦しめた貴族に慈悲をかけるつもりはなかったが、なぜか体がそう
させた。

男はもう一回死体を一瞥し、自分の部隊と合流すべく足を向けた。
部隊に追いつくところにはブリストルの街はいたるところに火が放た
れ、曙の空を赤く染めた。今でも、戦いは続いているのだろうか、
自軍装備の短機関銃や手榴弾の音が耳をつんざくように響き渡つて
いる。兵士の中にはアルビオン兵の死体から装飾品をあさり、原始
人のように取り合っている者もいる。まるで北の拳の世界におけ
るモヒカン頭のようなのだ。

「隊長、この街はすでに制圧完了しました。」

「うむ、そうか。油断してはならん。軍艦もすべて焼き払え。」

男が命令すると、軍艦に火が放たれた。軍艦はバキバキという音を
立て、火の衣をまとい海に引きずり込まれるかのように沈んでいく。

簡易宿の前には殺したアルビオン兵が下された魚のように一列に並んでいる。それに群がるのは買い出しの主婦ではなく、カーキ色の軍服と黒い軍服をまとった兵士だった。ここは魚市場ではなく死の市場と化した。

「やはり、労農軍の情報は確かですね。しかし、なぜこんなさびれた港町に？」

さつき報告にやって来た兵士が再び戻って問うた。男は燃え盛る港を見つめると引き締まった顔で言った。

「さびれた街だからよいのだ。それに今レコンキスタは領土を広げること必死になっている。そのうちに拠点を構えてしまった方がいい。」

矢十字党、労農党連合政権は暫定政権でありきちんとした首都や領土を持っていない。敵襲があれば遷都するという風来坊のような政権なのだ。まるで日中戦争の際の国民党政府のように。だから、支援を受けるときはいちいち場所を指定しなければならない。おそらくそういった背景を見て、第2次サポート案を決めかねていたのだろう。

「そうですね。しかし仮にレコンキスタがアルビオンを統一したときはどうなるのでしょうか？今は無政府状態になっているでしょうが、いずれは正式な政府を樹立します。その時我らは？」

男は何も言えず彫刻のように困った顔をした。少し考えたような間が空いたが男は口を開く。

「さあな、俺は政治のことはよく知らん。今はただ、貴族の魔の手から平民を救う義賊をやっているのさ。その時になって考えればいい。」

あまりにも楽観的な考えに兵士は呆れた顔をした。だが、自分たちがどんな理由で反レコンキスタ活動を行っているのかを考えてみるとその答えは妥当だとわかった。

矢労合作による反レコンキスタ活動は始まったばかりであった。のちにアルビオン・ブリタニア合作で作られた映画『内乱』ではブリストルの戦いで勇ましく戦う労働軍兵士と矢十字軍兵士の姿が猛々しく表現されていて、第2次ハルケニア動乱を扱った映画の中でも5本指に入る作品になっている。

アルビオンの怪談話2（後書き）

ご感想、ご意見をお待ちしています。

トカレフは何となく出しました。 労農軍のモデルはソヴェエト赤軍をモデルにしようと思ひまして。

森での戦闘 労農、矢十字軍の戦い

ブリストルから隣町までは一本道を通らなければならない。そこは以前森を切り開いて作られていて、両側を木で挟まれている。そこは暗く、現在は朝であるにも関わらず昼と朝の間と言った感じの明るさである。

ここをアルビオン兵達は戦列歩兵で遁走していた。前方には馬に乗った司令官らしき男がいて、後ろにはマスコット銃を右肩にかけた兵士が2列を作っている。約40人ほどいるだろう。中には包帯を巻いた兵士や木の棒を杖代わりに使っている兵士の姿も見受けられた。それらが対峙する森の間を悠然と歩いている。

それを猛禽類の目で息を殺し、狙っている者たちがいた。矢十字軍と労農軍だ。2軍はアルビオン軍から約10m離れた森という壁に身をひそめ襲撃の機会をうかがっている。彼らの持っている武器はブリタニアや天ツ上から送られたステンmark?や100式機関短銃などを持っている。しかし、支援が少なくなっている今ではちらほらとマスコット銃や兵士から奪った剣などを持っている者もいる。

「分隊長、まだでしょうか？」

茂みで100式機関短銃をアルビオン兵に向け、這いつくばっていたディックは同じ方向を見つめている分隊長に聞く。分隊長はこち

らを真剣な顔つきで言った。

「もう少しだ。あと少しで同志サワダが獲物をとらえる。」

サワダとは天ツ上政府に雇われたスパイである。本名ジュリー・沢田。天ツ人とアルビオン人のハーフで、彼を通して我々は天ツ上政府の支援を受けている。簡単にいえば通信使のような役目であるが、同時に兵士でもあり狙撃の腕はここにいる誰よりも立つ。今回はそんな彼にスタート係をやってもらっている。彼がアルビオン兵を狙撃することによって運動会のリレーのように全員がアルビオン兵に向かって突撃し、包囲せん滅をする合図をしてもらう。

アルビオン兵はいまだに悠然と戦列歩兵を続けている。ディックにはそれが死を覚悟した人間たちの強がりにも思えた。そこを考えてしまふとなんだか哀れにも思ってしまった。たとえ自分たちには憎い貴族でも家に帰れば奥さんや子供だっている。愛する者が待っている園へ帰ることができる。しかし、今ここで自分が殺してしまえばどうだろうか？悲しむだろう。深い海の底のような気持ちになり、何も手をつけることができなくなるだろう。教師をしていた自分には痛いくらいその気持ちわかる。

ディックは体をもぞもぞとさせると、引き金にかけていた右の人差し指を抜いた。考えてしまふと今ここから逃げ出したくなる。こんなつめたい鉄の塊を捨てて、身軽になつてどこかへ行きたくなる。これは恐怖からなのか、現実逃避からなのかはわからない。足の先から何かが迫ってくる気配がする。それは死なのか？私にはわから

ない。

その時だった。パンツ！、パンツ！という音が森を駆け抜けた。そしてバサバサツ！と鳥がはじかれたように木の上から離れていく。ディックが視線をアルビオン兵に移すと、2人のアルビオン兵が倒れていた。向こうも敵襲に気付いたようで、後ろ側にいた8人が持っていたマスコット銃をこちらに向けている。

「同志サワダの射撃だ。全員突撃するぞっ！」

分隊長はトカレフTT-33を空に向けてはなった。これによって森に潜んでた全員が波のように20人のアルビオン兵を飲み込んでいった。ディックも仲間に遅れることなく100式機関短銃を構えて、イノシシのように突進していく。

迷っている暇はない。今は戦わなくてはいけない。みんな許してくれ。

自分の心にそう言い聞かせながら、ディックは3m手前のアルビオン兵に向けて引き金を引いた。銃口からは8発南部弾が発射され、

アルビオン兵の体に赤いまだら模様を着色していく。さらに近づく
と右から来るアルビオン兵にも南部弾を撃ち込み、弾はアルビオン
兵の体に吸い込まれていった。あたりでは弾丸が飛び交う音やぎゃ
ああああという人のうめき声が聞こえ、阿鼻叫喚である。剣で突
撃したアルビオン兵がステンmark?で打倒されたり、矢十字軍
兵が剣で切りかかって長い槍で突きとおされたりしている。

「くそっ！故障か！」

飛び込んできたアルビオン兵を100式機関短銃で応戦しようとし
たが、故障によりむなしい音が聞こえるのみである。整備が行き届
いておらずこういったこともしばしばである。だから銃火器の消費
も早いのだ。ディックは100式機関短銃を捨てると剣を持ったア
ルビオン兵の下腹部を蹴飛ばし、転倒させそこに予備のトカレフT
T-33を頭にたたきこむ。安全装置のないこの銃は構えてすぐ撃
つことができる。さらには貫通力が高いため、アルビオン兵の頭は
花火のように砕け散っている。

ディックはこのトカレフTT-33を使って次々とアルビオン兵を
なぎ倒していった。四方八方彼を囲むようにして襲うアルビオン兵
に対して時計周りで周り、7.62ミリトカレフ弾をたたきこんで
いく。周りにはトカレフ弾の抜け殻が円を描くようにして散らばっ
ている。

「くっ！あらかた片付いたようだな。」

ディックは余裕ができあたりを見回す。一部では1対1の戦闘が行われているが、敵は数えるほどにしかない。彼はアルビオン、労農、矢十字3軍の死体が散らばる道を歩いた。何ともむなしい光景だ。みんな死んだ時と同じ顔をしている。その中にはこの世に未練があるような顔をしている人もいる。だがしかし、ディックはそんな念を打ち消そうとした。

戦争をしていればこういったことはつきもの。こうなることを知ってここにいるはずだ。後悔はないだろう。

ディックは心で呪文を暗唱するかのように言った。

「た、助けてください……………」

どこからか人の声がした。それはありのささやきのような声で高い女性の声だった。その声の糸を探るかのように足を進める。そこには女性がいた。長髪でワンピース姿の20代くらいの女性だった。彼女は近くにあった岩の影に隠れるようにして足を伸ばしている。白く洗礼された足にはそれに似つかわしくない切り傷が大きく刻ま

れていた。さらには頭部からも出血しているのか、右手を押さええている。その手には血がこべりついていていた。ディックは首を左右に振ると、急いでこの女性を手当しようと近づいた。

「おい、貴様何やってるんだ!!」

分隊長がディックのもとにあわてて駆け寄って来た。彼は鬼のような形相でこっちを見る。それに負けじとディックは声を張り上げた。

「負傷者の手当てです!同志分隊長。今からであて……。」

「いかん!即射殺せよ。」

顛末を言おうとした瞬間分隊長は銃を抜いて、負傷している女性の前につきつけた。刹那、銃口から放たれた7・62ミリトカレフ弾はまっすぐと女性の頭部めがけて飛び、頭部を火花に変えた。ディックは一瞬事が理解できなかった。そして、徐々に怒りがわいてくる。

「同志分隊長。これはどういうことですか!？」

ディックはさつき分隊長がした鬼のような形相で見る。分隊長は当然だろ、と言わんばかりの態度で言い放った。

「敵兵を倒したのだよ。」

「しかし、彼女はアルビオン兵ではありません!」

ディックの発言に分隊長は呆れた顔をして言った。

「油断は禁物だぞ。同志ディック。彼女がもし杖を持っていたらどうする?後ろを向けたらお前は終わりだ。それに彼女を生かしておいてはいかん。野に放せば我らの事をアルビオンに話すかもしれない。そういったことを考慮してやったことだ。」

「しかし……!」

「目を覚ませ、同志ディック！ここはお前のいた学校ではない！戦場なのだ！そういう考えは捨てる！」

分隊長の一喝にディックは口をもごもごさせて、何も言えなくなっ
てしまった。確かにそうだ。彼女がけが人のふりをしてわが軍に接
近しようとしていたのかもしれない。それに助けたってどうする。
絶対ここにはおけない。物資が少なくなっている。自分の分だけで
も精一杯なのに他人のことなんかもってのほかだ。

ディックは言葉では表現できない、苦しみにただ呆然と立ち尽くし
た。

森での戦闘 労農、矢十字軍の戦い（後書き）

ご感想やご意見お待ちしています。

前回、労農軍や矢十字軍の戦闘が未消化に感じたのでこの話を作りました。イメージは映画『パトリオット』のイギリス軍がヒュロン族に襲われるシーンを浮かべて書きました。

大使館での出来事

アルビオンで矢十字・労農両軍が戦っているころ。トリステイン王国首都トリスタニアにある駐トリステインブリタニア大使館の一室ではアーサー、ヴィクトリカ、才人、ルイズの4人が集められていた。

「こんな遅くに呼び出してすまなかったな。じつは君たちにある人……いや、あるお方からの用事を伝えようと思ってね。」

テーブルに座っている4人の周りを回るようにして、ハリファックス卿は言う。言い終わってその場に止まると才人が彼を見て聞く。

「用事ってなんだよ？」

「それは直々に聞いた方がいい。ということでクライアントを呼んでくることにしよう。」

「ちょっと、クライアントって誰よ？」

ルイズがささやくように、アーサーに問いかけた。それに対しアーサーは鼻で笑った。それはまるで誰だかわかっているような不敵の笑みのようだ。

「見当はつくな。」

「ああ、こんなことするのはあの方に違いない。」

ヴィクトリカもそれに続く。

「もう大丈夫です。入ってきてください。」

ハリファックス卿はドアの方を向いて、それを呼ぶような声で言った。すると、ドアの向こうから2人の男女が入って来た。それを見るとルイズは膝をついた。

「ひ、姫殿下！」

「ああ、ルイズ・フランソワーズ！私の幼馴染！」

アンリエッタはうるんだ目をして、久しぶりに会うルイズに抱きつき、きゅきゅきゅと始めた。レズハッピーと言えるような光景だ。

「国王陛下。お久しぶりでございます。」

「久しぶりだな父上。」

アーサーはルイズに続くようにして臣下の礼をとる。ヴィクトリカは父親が一人暮らしの家を訪ねてきたように言った。そこにいたのはブリタニア連邦王国国王アルバート6世とトリステイン王国王女アンリエッタだった。2人は正体がわからないように黒い衣装に身を包んでいた。

「久しぶりだな、わが娘にアーサーよ。元気にしておったか。」

「陛下の口から労いの言葉をもらえるとは一族の冥利に尽きます。」

「それはよかった。余もわざわざここに出向いた甲斐があったということだ。」

「そんなことより父上、今日は一体何の用で来たのだ？」

ヴィクトリカが親子の会話を始めようとしていた。アルバート6世は一瞬顔を緩めたが、再び堅くなった。そして政治家に裁可するよくな口調で言った。

「実はなアーサーとヴィクトリカにアルビオンへ行ってもらいある男にあつて来てほしいのだ。」

「ある男とは？」

「ジュリー・サワダという天系アルビオン人の男だ。彼は友邦天ツ上帝国のスパイをやっていて、現在アルビオンで2つのレジスタンス軍をまとめている。2人はサワダと合流しアルビオン王室の人間を救出してもらいたい。」

アルバート6世はそういうと目線を隣にいるアンリエッタ姫殿下に移した。彼女は貧血状態になったようにふらふらし、後ろにのけぞった。まるで悲劇のヒロインを演じているかのように。

「ああ、何ということでしょう。このままでは彼らは反乱軍に捕ま
つて……！」

「姫様、お気を確かに！何があつたのですか？」

ルイズがあわてて、アンリエッタの背中を支えに回る。才人は大げさだな、と言いたげな顔をしてそれを見ている。話によれば姫は軍事同盟を結ぶため、ゲルマニア皇帝に嫁ぐことになった。しかしあ

る手紙の存在によって婚約が反故になってしまう可能性が出てきたのだ。それは昔アンリエッタがウェールズ皇太子に認めた恋文であった。それが反乱軍のもとへ渡ってしまうと同盟は白紙に戻されトリステイン王国は1人でアルビオンに立ち向かわなければならなくてしまふのだ。

そこでそれを阻止するべくレジスタンス軍に支援を送っているブリタニアと協力してウェールズ皇太子を救出しようとしているのだ。幸いトリステインとブリタニアは貴族政府を承認したくないという点と脅威を抱いているというところは一致している。しかしブリタニアはただ支援を行っているだけで対アルビオン戦争をするかは決めかねている。（参戦気分で行るのは首相であるヘーゼルシュタインと閣僚だけである。）

それにトリステイン貴族の中には先の大戦を根に持っている人もいる。そのため正式な国交樹立も難航しており、国内にはブリタニアとの軍事同盟締結派とゲルマニアとの軍事同盟締結派という2つの貴族が存在する。今はゲルマニア派が多数でありアンリエッタはそれを考慮したうえでの婚約だった。

「ああ、そんなことが起こっていたとは……………」

アーサーは驚いたフリをした。なぜならこんなことがおきることは想定内だったのだ。外務大臣である父からは我が国がレジスタンス

軍を支援していることは知っていたし、もう少しすればいやでも同盟を結ばざるおえなくなる。我が国の位置はとてもおいしいところにある。さらにアルビオンは我々が支援を送っていることは承知の上であろう。

それにブリタニア政府は遅かれ早かれ王室の重要性に気付くだろう。もし参戦して勝利した際には戦後アルビオンの統治を誰に任せる？ もちろんフリッツ・カーンやアール・ブラウダーには任せることはできない。ロマリアが文句をつけてくる可能性があるからだ。対アルビオン戦後は争いを避けたいと考えるブリタニア政府は必ずほかの貴族が王族を必要とする。そういったことを考えれば、今回の作戦はのがれることのできない試練となるだろう。

「そこでブリタニアの皆様にも力を貸してもらいたいとアルバート陛下に進言したのです。どうかこの姫のためにもやってはいただけないでしょうか？」

アンリエッタはアーサーの腕をつかむと、顔を近づけた。よく見ると目から涙を流しており、目じりからは通り跡が残っていた。その顔が月の光に照らされて絵画に映る女性を感じさせた。

アーサーは美女にそこまで迫られると断り切れなかった。何よりも彼女の放つ魅力と妖艶な香りが頭を覆っていてその考えを忘れさせていた。

「わかりました。不肖アーサー、姫殿下のため八面六臂の活躍をしてまいります。」

恭しく英国紳士のように挨拶すると、手の甲に接吻をした。ルイズはその横から入ってくると負けじと声を張り上げた。

「あんたみたいな島蛮人に負けてられないわ！姫様、私もお請けさせてもらいますわ。ヴァリエール公爵家の三女としてご望みならば火の中、水の中、奈落の底まで行ってみせますわ！」

「こいつらは……………」

どっかの修造のごとく燃え上がる2人を尻目にヴィクトリカは呆れている。それを見ていた才人は聞いた。

「あのさ、こいつはいつも……………」

「そうだとも。あの男はいつも美女の話には鏡のように光るキザ男なのだよ。才人。」

ヴィクトリカは遠い目を見ると持っていたパイプをくわえた。才人は3人が繰り広げるお芝居を観客のように観賞していた。

「話はわかったかね。アーサー。君を信じているのだ、やってくれるかね？」

すっかり忘れ去られていたアルバート6世は空咳をしていった。アーサーは再び臣下の礼を取った。

「御意。国王陛下のため獅子奮迅して見せます。」

「そうか。それなら頼んだぞ。では、余はこれで失礼するでしょう。」

アルバート6世はアンリエッタとともに大使館を去った。アンリエッタは帰り際ルイズに水のルビーの指輪を渡した。もし、ウェールズ皇太子が自分を信用しない場合にはそれを渡せば証明できるといつて渡したものだった。

アーサー達の長い旅が始まったのだ。夜空は深くこれからの旅の奥深さを予測しているようだった。

「よろしいのですか、陛下？あんなことをやってしまつて。」

ラ・ロシエールに行く道中を走るロールス・ロイス社製自動車の中
運転手であるモズリーがミラー越しで国王に聞く。アルバート6世
はそれがどうしたのだ、と言わんばかりの態度である。

「問題はない。ウェールズは我が国にも必要な存在だ。」

「しかし、このようなことが発覚すれば我が国とゲルマニアの關係
に亀裂が走るのでは？」

アルバート6世はそこを聞いてほしかった、という顔をしていった。

「それは必然だ。同じ境遇の者同士が共存できるケースは少ない。
それに貴族政府が正式に発足すれば世論だつて対アルビオン戦争支
持に傾くはずだ。無知な国民が付和雷同するのはよくあることだ。
そのころにはアルビオンでもブリタニアのハルケギニア進出を脅威
に思い戦争を仕掛けてくるだろう。無論その相手は我が国とゲルマ
ニア、そしてトリステインだ。次の戦争はアルビオン対ブリタニア、
トリステイン、ゲルマニア連合の戦いになる。そして勝てば次はゲ
ルマニアが我が国の敵となる。」

「それはなぜですか？寧ろ我が国の力を知らしめられ友好的になる

でしょう。」

アルバート6世は呆れかえったような顔をした。そしてシナリオライターのような気分で話し始めた。

「君はそんなことも分らないのか。戦後トリステインとの国交締結は成功する。すると我が国の国力を知った彼らは奴隷のように親ブリタニア政策を行うであろう。それによってトリステインは裕福になる。するとそれに嫉妬するのはゲルマニアだ。奴らはトリステインとブリタニアに敵意を向けるだろう。まるでそっぽを向かれやきもちを焼く子供のように。」

「しかし、そんなことはないと思います。そんなことをしたら我が国はゲルマニアに対して経済制裁を加えるでしょう。そうなれば手も足も出ません。迂闊に戦争に訴えるのは考えにくいと思いますが・・・。」

モズリーは納得がいかないように首をひねった。後ろの席で座っているアルバート6世はフツと笑うと補足説明をした。

「国は2つだけではないぞモズリー。ほかにもいるではないか、ガリア王国とロマリア連合皇国という国がな。」

モズリーはさらにわけがわからなくなった。ゲルマニアに全く無関係な2国がどうやってからんでくるのだ。しかもゲルマニアと羅馬リアは仲が良くない。それがどうやってここに絡んでくるのか？

「ガリア王国では目くそ鼻くそがドングリの背比べのように争っている。今情勢がつかみにくい情勢になっている。そして羅馬リアだ。かの国は我らを異端者として扱っている、神官だといって威張りくさり宗教という名のアヘンをばらまく商人なのだ。そいつらがゲルマニアに麻薬をばらまくかのうせいだってある。」

ブリミルの血を受け継いでいないゲルマニアは地方の力が強い連邦制国家である。したがって中央にいる皇帝の力も弱い、アルバート6世は皇帝が欲を出して権限強化のためブリミル教を使うことを警戒していた。

モズリーは納得したように頷いた。ブリタニアには敵が多くこの対アルビオン戦争がすべての解決に至らないことを知ったと同時に国王の聡明さに驚愕した。

さすがは暗黒王と言われるだけあるな……。

「おい、モズリーなんか言ったか？」

アルバート6世の眼光がモズリーの背中に鋭く突き刺さった。一瞬背中に汗が流れたような感じがしたがそれをぬぐうかのようなしぐさをした。

「いいえ、何でもないです。」

アルバート6世はそうか……、と言うと座席のシートに座りなおした。モズリーはフウと息を吐いた。この男に嘘は通じない。そう確信した瞬間であった。

大使館での出来事（後書き）

ご感想、ご意見お待ちしております。

BIOHAZARD 0 (の使い魔)・アルビオン黙示録 1 (前書き)

アーサー達4人はトリステイン・ブリタニア両国君主の命によって行方知らずになっている皇太子ウェールズ・デューダーを探しにアルビオン王国へ向かった。旅の途中立ち寄った食堂で4人はある老人の”死んだばあさんを見た”という話を聞き、老人が住む村へ向かった。

BIOMHAZARD 0 (の使い魔)・アルビオン黙示録 1

アルビオン王国にあるとある街の食堂。4人はここで朝食を摂っていた。

「ねえ、あんた。こんなことで見つかると思うの？」

ルイズは不満がありそうな態度をアーサーに示した。示されたアーサーはむさぼっていた七面鳥の手を止めた。そして右手をうちわで仰ぐようにして軽そうに言った。

「大丈夫。大丈夫だよ。探しに行つてすぐ発見できるのだったら故人になつてるよ。」

実際簡単に短期間で見つかるならすでに貴族政府が処刑しているだろう。敵を欺くにはまず味方から。身内や顔見知りに見つかつてしまつようなら隠れたつて意味がない。

「そんな楽観的に考えている場合？姫さまとゲルマニア皇帝との結婚はもうすぐなのよ。もしあの手紙が向こうの手に渡つたらどうなると思つなの？」

アーサーの緊張感のなさに呆れ、ルイズは机をたたいて怒りを表現した。正直ゲルマニアは嫌いだ、幼馴染が悲しい顔をするのは見たくない。その心がルイズのやる気スイッチをONにしていた。

「いいじゃん反故になっても。いざとなったら俺たちがいる！ゲルマニアなんかよりよっぽど頼りになるぜ。」

怒りに震えるルイズを尻目にアーサーはドヤ顔をした。まるで俺たちに任せると言わんばかりに。それがルイズの怒りの窯にまきくべた。

「あんたたちみたいなの野蛮人の助けなんていらないわ！貴族が銃を持つ国と同盟なんてお断りよ！」

「貴族が銃を持つ国に負けたのはどの国だ？くだらない貴族のプライドを振りかざしてもウェールズは見つからんぞ。」

アーサーの横で一服していたヴィクトリカが茶々を入れた。火山のごとく熱くなっているルイズに対してヴィクトリカは氷のようなつめたい声だった。それがまるで見下すような態度に見えた。

「うるさいわね！黙りなさい！チビのくせに口だけは大きいのね！」

「君の胸だつてチビではないのかね？人のこと言えないではないか。」

ヴィクトリカは視線をルイズの胸に移した。そこには胸のような山地は存在せず、ただ広い平面だけが続いていた。

「どついう意味よ！そんなことあなたに言われる筋合いは……」

「い、生き返つた！かみさんが生き返つたぞ！」

ルイズの反論は食堂に訪れた闖入者によつて遮られた。それは70代後半の男性老人で腰は半円を描くように曲がっており、杖をついていた。老人はカツカツと杖について食堂の中心部にやってきた。すると彼は目を飛び出んばかり見開き再び叫んだ。

「戻つてきてくれた！メリンダがわしの元へ戻ってきたんだ！奇跡じゃー！ブリミルの奇跡じゃー！」

老人はこぶし一つ入りそうなくらい口を開け快哉を叫んだ。

「そりゃよかつたね、じいさん。だからさ席に座ってくれよ。」

食堂のオーナーらしき人物は冷静な態度で老人を慣れたように扱った。老人は案内されたカウンター席に座り何事もなかったようにオーダーを始めた。

突然の出来事にもかかわらず客は一瞥しただけで何事もなかったように料理にありついていていた。すると俺たちの座っている隣の席の男2人組が口を開いた。

「おいおい、また来たぜ狂言ジジイが。」

「またかみさんの話かよ。たまには息子さんの話もしてやらないと泣いちまうぜ。」

2人とも老人を鼻で笑った。そしてそのあと顔を見合わせると下品な笑いを上げた。アーサーはさりげなく隣の男に話しかけた。

「なんだいあのじいさんは？毎日来ているのか？」

「ああ、そうだとも。来るたびにかみさんの話をする。それも毎日同じ話を。」

「ボケちまっただんだよ。もう80近いからね。それにジジイだって妻子に逝かれてさびしいんだよ。」

「最近、俺たちはジジイを下手なピアノ奏者だと思っようにしている。案外慣れればいいもんだよ。」

2人は再び顔を合わせて笑う。アーサーは老人の言動が耳について離れなかった。"かみさんが生き返った。"メイジがこの老人をだまそうとゴーレムで作った人形を差し向けたのか？でも理由がわからないし、ゴーレムを作っても生身のような動きはできないはず。ならどうやって生き返ったのだ？

老人が発した一言の意味が気になって頭から離れなくなっていた。考えれば考えるほど脳に絡みついてくる。これは老人の口から真意を聞くしかない。そう思ったアーサーは席を立ち、カウンター席の方へ足を進めようとした。

「やめなさいよ。かかわらない方がいいわよ。」

ルイズがアーサーの服の裾を引っ張る。老人の発言で怒りどころではなくなってしまったルイズは怖気づいたような口調で制した。

「何を言ってるんだよ。こういう小さな情報も答えに結びつく場合だってあるんだぜ。」

「だって如何にも危ない人じゃない。家に連れ帰って何されるか・・・・。」

「元々危険は承知でここに来たじゃないか。毒を食らわば皿までも危険に入ってしまったら置くまではいつてしまおう！」

「ああもう！わかったわよ。勝手にしなさいよ！」

ルイズは半分やけくそになった。それによって自由の身になったアーサーは老人の方へ足を進めた。

「ご老人。ちょっと話したいことが・・・・。」

アーサーはカウンター席の老人の背中に声をかけた。その声に気付いたのか老人はこっちを向いた。顔は面長でしわが顔を埋め尽くしており猿のようである。その顔がニヤツと不気味に笑った。

「おおそうか。君もメリンダに会いたいのか？いいとも彼女はとて

も寂しがりやで毎日人を求めて徘徊している。いいところに来た。
君みたいな好青年を歓迎するよ。」

老人はものを言おうとしているアーサーを遮って勝手に話を切り上げた。しかし自分が言いたい事ややりたいことを予言者のごとく自問自答してくれて許可もいただいたので、まあいいやという気分で俺は老人の住む村に行くことになった。

BIOHAZARD 0（の使い魔）・アルビオン黙示録 1（後書き）

ご感想、ご意見お待ちしております。

いよいよアルビオン編に行きます。

食堂で出会った老人とともに俺たちは彼の家がある村に向かった。そこは4つ以上の山に囲まれるような形の小さな村であった。門をくぐるとまっすぐとした道があり両脇には住民の家があり奥の方には村長の家と思しき建物が立っていた。老人の家は村長の家よりも裏側にあった。木造りの1階建ての家で所々ひびや腐っている部分があがえた。中も大半をゴミが占拠しているような感じで先へ進むにはかき分けていかなければいけないほどだ。

「な、何よここは！？巨大なゴミ箱か何か！？こんなところに私たちを泊める気？」

ルイズは4人の一番後ろを歩きながら家の惨状に驚愕した。公爵家の娘として生まれた彼女にとってはこの状況に声を上げずにはいられなかった。

「そんなこと言っなよ。聞こえるぞ。」

才人は後ろを向いて人差し指を立てて注意した。

「確かにこれはひどいな……………」

アーサーは前方にあった木くずを右手で押し出しながらルイズに同情した。おそらく奥さんを亡くしたショックで何も手がつけられなくなってしまったのかもしれない。よく午後5時くらいから放送されているニュース番組でスクープされるゴミ屋敷を思い出した。彼もゴミ屋敷家主と同じ状況になっているのだろう。

俺たちは奥の部屋に案内され、男女2人ずつ2つの部屋を使うこととなった。しかしこの部屋もさっきのゴミ街道と同じくゴミであふれかえっていた。仕方がないので晩御飯の時間まで部屋を片付けることにした。

そういえば気になることがある。なぜ老人は奥さんが生き返ったという言葉を使ったのだ？この部屋の状態から見て精神状態はよいとは言えないだろう。それなら顔が同じ人と間違えてもおかしくはない。さらに気になっているのは老人がそれ以上を語らないことだ。いつもあの食堂にきて同じことを言う。だがそれ以上は言わない。毎日奥さんに会っているなら話をしたり食事をともしたりするにとどってあるだろう。にもかかわらず、生き返った話しかないのはなぜだ？

その考えが頭の中をぐるぐる回って離れようとしなかった。そうこうしているうちにすぐに日は落ちて空には墨汁をばらまいたところに2つの月が浮かび上がった。4人は家の玄関から向かって左側にある居間に通された。そこにはテーブルがあつて上には様々な食事

が並べられた。

「さあさあ、食べて食べて。今日は妻が来るから豪勢にしてみたから。遠慮なく食べてね。」

老人は屈託のない笑顔で食事を勧めた。彼は席に着くと自作の料理に手をつけた。俺たちもそれに続くように手を伸ばす。老人の料理はどれも絶品ばかりであった。蜂蜜を塗ったチキンは蜜の甘さとチキンの柔らかさがマッチして絶妙な舌触りを感じさせる。ほかにも山菜で作ったサラダのようなものやフィッシュアンドチップスどれもこれも三つ星レストランのメニューにいれても文句なしの一品だった。

「ご老人、一つだけ聞いてもいいか？」

アーサーは食べる手を休めて老人の方を向いた。

「なんだね？どうかしたかね？」

老人は首をかしげて言う。まるで何があつたのかねと言わんばかりの顔だ。

「奥さんが生き返つたと言いましたよね？あれはどういう意味ですか？」

アーサーの問いに老人は少し笑って言った。そして楽しい話をするかのように切り出す。

「言葉の通りだよ。メリンダが帰って来たのさ。わしもあの姿を見たときは驚いたよ。10年前に死んだはずの妻が村を歩きまわっているのだから。信じられなかった。ただある日の晩闇夜を徘徊するメリンダの姿をみたときそれが本当であると気付いたのだ。」

「しかし人が生き返る話なんて……。」

アーサーは合点がいかない顔をした。聞いていると怪談話を聞かされているような気分になる。

「そうだとも。始祖ブリミルではない限り人をよみがえらせること不可能だからな。けどわしは幽霊でも構わない。もう一度メリンダの姿を見れるのだから、これ以上の幸せはない。メリンダは幽霊

になつてもわしを見まもり続けているのだらう。それだけでもうれしい限りだ。」

そんな話を聞いていると映画『ゴースト』を思い出した。その映画もそんなような話だ。死んだ彼氏が幽霊になつても彼女を見守り続け、最後には幸せなキスをして終了するロマンチックな内容だった。これを思い浮かべると老人の話も感動ストーリーになるはずだが・
・
・
・

「でも、もしかしたらあなたを狙う何者かの使いかもしれません。念のため用心しておいた方がいいと思いますが。」

アーサーの一言に老人は露骨な不快感を出した。そして少しつりあがったような声で言う。

「自分の妻を疑つてかかる夫がどこにいるのだね？君はそういうことをするのか？」

「いえ、そういうわけでは御座いません。ただもしものことを考えて注意も必要だと。」

「なぜだね？メリンダはそんな攻撃的な人間ではない。」

「ですが、一度は死んだ人間なんでしょう。幽霊だったり何者かに操られている可能性だってあります。その場合は操者のいいなりになっっていることだって。」

老人は机をバンツ！とたたくと血管が切れんばかりに眉間にしわを寄せ鬼のような形相で叫んだ。

「不愉快だ！メリンダが操られているなんて狂言だ！そんなはずはない！彼女はわしのために生き返ったのだ！疑うのであればここから出ていくがいい！！」

老人は雄たけびを上げると勢いよく席を立ちあがり玄関へ向かった。

「今からメリンダを向かいに行ってくる。それまでに頭を冷やせ。できないならここから出ていくがいい。そしてどこへでも行け！いいな！？」

老人は勢いよくドアを閉めるのが最後の音でありしばらく家には沈黙が流れた。取り残された4人のうち3人はみんなアーサーに視線

を向けている。それはアーサーにとって無言の圧力をかけられているような気分であり、気まずい空気をつくりだした。しばらくして小声で才人がアーサーに話しかけた。

「おいお前、何怒らせてるんだよ。あのおじいさん、すごい剣幕で怒ってたぞ。」

「そうよ。どうするのよ！？もし追い出されたらあんたが寝ずの番しなさいよね！？」

とルイズが。そして最後にヴィクトリカがとどめをさすように。

「全く人を怒らせることにかけては天下一品だな。私もたまげるよ。」

「す、すみません……………」

アーサーは席に座ったまま小さくなってショボンとなった。そしてまた沈黙が帰ってくる。おかげでこの古いボロ家がきしむ音やネズミが走り回るような音がよく聞こえてきた。

俺は夕方から考えていたことを再び考えることにした。しかし謎が

増えてしまっていた。なぜ彼女は夜にしか姿を見せない。仮に幽霊だとしても村を徘徊しているばかりではないだろうし、時がたてばこの家に入ってくる。にもかかわらず彼女はここに来ようとしてもいい。それが理解できない。この家にも老人にも相当な思い入れがあるはずなのに……。

その時だった。

「ぎゃあああああああああああ。」

外から村全体に響き渡るような男の悲鳴が聞こえた。それはさっきメリンダを迎えに行くといって家を出ていった老人のものだった。

「ご老人！！まさか……………！！」

アーサーは何も考えず、テーブルから立ち上がり家の外へ出た。外はすでにまっ暗闇になっており、明かりは杖と空に浮かぶ2つの月だけだった。足元も照らし出さなければ足も見えないくらいだ。

「おーい！大丈夫か？」

アーサーが闇夜に向かって叫ぶ。すると老人は悲鳴で返事を返した。それは息がきれそうな声でフリ絞って叫んでいるように感じた。

「ぎゃ ああああああああ！ やめてくれえええええええええええええええ！」

4人が悲鳴のする方へ走る。その先は家の裏側だった。そこで老人は地獄からの叫びを上げていたのだ。しかし先が深海のように暗く、見えなかつたので老人の元へは近づかず杖を抜いてライトを唱えて、それを悲鳴がする方へ向けた。

ライトが映し出した光景はすさまじいものだった。そこには2人の人間がいて馬乗り状態になっていた。下にいるのは老人で乗っているのは30代くらいの女性だった。そこで女性は老人の両肩をつかんでその首元にかじりついていたのだ。それによって2人の周りには血だまりができて4人の方にも血しぶきが散り、手をイカの触手のように動かして口で抵抗していた老人は徐々に弱弱しくなりついには蚊の鳴くような声になって最期こと切れた。なんと女性は老人の首肉を引きちぎってかみ殺してしまったのだ。

「な、何よあれ………?」

その光景を見ていたルイズが怯える声で女性の背中を指差した。その声に反応したのか女性は立ちあがってこちらを振り向いた。刹那彼女の体臭がふりまかれた。それは死んだ人が腐るときにばらまく腐臭に近かった。女性は低いうなり声を上げるとこっちを見た。

女性の目は濁っており生気がなく皮膚も所々はがれおちているような箇所があり、顔は老人の鮮血で赤く染めあがっていて、口には老人の肉片がくわえられていた。

確かにメリンダは生き返ったのだ・・・・・・・・。

BIOHAZARD 0（の使い魔）・アルビオン黙示録 2（後書き）

感想、ご意見お待ちしております。

「な、なんなのよあれ!？」

ルイズが前にいる女性を見て恐怖を叫ぶ。すると女性は老人の血にまみれた口を開き、低いうなり声を上げた。口からは赤色の鉄漿を塗ったような歯が見えて、そこから赤い涎が滴り落ち、カチカチと開閉する。まさに獲物にありつかんばかりの表情をしている。女性は両腕を前に伸ばし”前へならえ”の形をとると足をのばしたまま、こちらにゆっくりと近づいてきた。まるで夢遊病患者のようにふらふらとおぼつかないような足取りで。

「止まれ!これ以上近づくと撃つぞ!」

あやしさを感じ取ったアーサーは銃を抜くと、それを相手の右足に向けた。右足は変色していて、一部皮膚が落ちていて白い棒のようなものが見えてくる。普通ならのた打ち回って苦しむくらいの痛さだがそこからは出血は見られず、顔を苦悶にも歪めてもいない。顔は獲物だけを見つめていた。女性は忠告も聞かず、血に飢えた目と血だらけの口を開閉させながら腐臭を振りまいて近づいてくる。

仕方ない……………。

女性に向かって一発発砲した。その弾は右の太ももに直撃しめり込んだ。しかし、そこからは血が噴き出すことはなく、半分乾いた血が穴から流れ落ちるだけだ。さらに驚くことは女性がまったく痛みを浮かべた顔一つしないことである。普通だったらあまりの痛さに泣き叫んでのた打ち回るはずだが顔一つ崩さず、一段高いうなり声を上げて近寄って来たのだ。

こいつはまさか………。

アーサーは確信した。生気を感じられない濁った眼、夢遊病患者のようなおぼつかない足取りそして人間の肉を食らう行為。間違いない、こいつはゾンビだ。昔テレビで見たことがある。屍が突然起き上がってかつての友人や家族を容赦なく食らいつきその人間をゾンビにしてしまう。集団で襲いかかれた時は数の暴力で腸を引き裂かれ、新鮮な肉を喰らわれてしまう。彼らは頭を打つか脊髄を損傷させるかしない限り活動を止めない。生きる人間がいる限り彼らも生存し続ける。

「頭を撃てばいいのか……？」

まさかこの世界にきてゾンビに巡り合えるとは思えなかった。俺はゾンビ映画も大好きだ。地上を奴らが支配し、生き残った人間が立

てこもりそこで起きるドロドロの人間関係というのが好きだった。そうした非日常な世界に不思議なあこがれがあったのだ。毎日同じようなことをして生きていてはつまらないどうせならバイオハザードのような世界になってほしいなと妄想することもあった。

今は非日常の中に非日常があり、アーサーはなんだか心が舞い上がっていくような気分がした。ゆっくりと銃口を上げた。俺とゾンビの距離はもう目と鼻の先だ。腐臭が強烈になり、ゾンビの濁った眼と腐りかけで顔から離れかけている皮膚がよくわかる。銃口をゾンビのひたいにあてて、ぐりぐりともてあそぶように銃を左右に振るとハンマーを引いて発砲した。ゾンビの額にはビー玉くらいの穴があいて、少量の血液が飛ぶと、後ろにのけぞって倒れて動かなくなった。

やった・・・・・・・・！！

それは二重の喜びだった。ゾンビを倒したこととこの世界で巡り合えたこと2つの歓喜であった。

「死んだのか？」

才人が化け物の死体を覗き込んでいう。いつのまにか彼の後ろに隠れていたルイズも背中から顔を出しながら恐ろしい化け物を見つめ

た。

「ああ、死んだ。正確には最初から死んでいたといった方が正しいな。」

アーサーは落ち着いた声で言った。そう、こいつらは最初から死んでいるのだ。それを何者かが蘇らせた。(魔術やウイルスを使って)しかしそれならどうやって蘇らせたのだろうか。バイオハザードではTウィルスが原因で死者が蘇ることがあるが、『処刑山 デッドスノウ』のような隠れてあった財宝を着服してしまったためだとかあるが……。やっぱりここは王道を重視して原因はわからないようにした方がよいのか。つまり調べないということだ。原因不明の方が得体のしれない恐怖を演出できるからそうしたほうがよいのか……。つい考えてしまう。

「どういうことだよそれ？」

「こいつらはゾンビだ。何らかの方法で蘇った死体だよ。」

才人は驚いた。こんな世界にもゾンビがいるとは思いつかなかった。この時代顕微鏡も満足にない時代に死者をよみがえらせるウイルスを製造することは不可能だ。

「どうしてそんなことを……………」

ルイズは驚愕したまま弱弱しい声で聞いた。目的はわからない。だがおそらく今回のアルビオンでの革命と何かからんでいるような感じはした。ゾンビを飼いならして自分の意のままにして、兵士にすることだってできるからだ。現にゾンビ映画の中では生前の記憶から銃の撃ち方を思いだしたり、ナイフを持って宝を奪いに来た人間を襲ったりするゾンビだって出てきている。充分軍事利用できる。

「詳しいことはわからんがこれを使って何かしようとしていることは確かだ。」

「どういうことだ!?!」

「不死の軍隊を作ろうとしてる。」

「なんておぞましいことを!始祖ブリミルに反することだわ!」

敬虔なブリミル教徒であるルイズは憤慨した。人間の生死は神であるブリミルが決めることであり、それを人間が行うことは非常におかしい行為に等しい。

「でもさ、誰がどうやってこんなことを!？」

「俺にもわからん。だがわからない方が俺的には……。」

「なんでわからないのよ!?! だいたいあんたが大丈夫って言ったから来たんでしょ? きちんと調べなさいよ!?!」

途中から趣味に走りそうだったので言葉を尻すぼみにしたら、ルイズはそれをわからないのでもごもごしていると思って、声を張り上げたのだ。

「そう怒るなよ。ただ俺は趣味の事を言っただけであって。」

その言葉がルイズの感情を逆なでした。こんなときに趣味の話をするなんて！命の危機があつたところなのに危機感がなさすぎる。ありえないわ！

「趣味？本当にあなた達ブリタニア人は野蛮人ね。争いごとを趣味だというなんて。だから戦争も強いのかしら。」

「君たちだつて意地を張ることが趣味ではないかね？」

今まで黙っていたヴィクトリカが争いの爆弾の導火線に火をつけた。彼女だつて現国王の娘であり、国の悪口を言われて黙っているわけにはいかないのだ。

「あらゝ争うことよりは意地を張ることの方がましだわ。」

「意地を張るため高級品にありついて豚のようになっていくのがいのか？」

「うるさいわね！その方がましだわ！私たちには貴族のプライドがあるのよ！」

ヴィクトリカは嘲笑すると両手を広げた。お話にならないといわんばかりに。そこで終わりにすればいいのだがルイズの怒りは頂点になっている。

「なによ！？馬鹿にしているの？」

「いいや、私は別に。」

「だったら何よ！？その態度は！？だいたいあんたは……。」

「もうやめろよ！こんな時に争うのは死亡フラグだぞ。」

あんまりにも喧嘩が長引きそうだったのでアーサーが二人の間に入った。2人はお互いに視線をそらしてツンツン！とした態度をとった。

こういったときに争うのは味方内の内部分裂を引き起こしかねない。そこにゾンビが襲って来て乱戦になり敵味方すべてが全滅してしまうのだ。

「よかった。なんとかおさまったみたいだな。」

才人はほっと胸をなでおろすように言った。しかし、実際おさまっていなかった。正確にはさっきより大きく状況が悪化するだろう。

「いや、これよりももっと悪くなっている。」

アーサーはゾンビが横たえている方に耳を澄ました。さっきのうめき声が大きくなっている。それに今度は1つのうめき声ではなく複数聞こえてくる。それが何重に折り重なって合唱をしているように思える。合唱団が俺たちを囲む森の木々を揺らす。ゾンビが複数いることが分かった。1,20人そこらではない。軽く5,60人はい。完全に囲まれた。

「どついうことだよ?」

才人が恐る恐るアーサーに聞く。

「ゾンビに囲まれた、5、60人はいるだろう。」

「おい、どうするんだよ？」

アーサーはニヤツとするとルイズとヴィクトリカの方を向いた。

「これからゾンビ包囲網を強行突破する。足がちぎれるくらい走れ。」

「

「何よそれ！私に走れっていうの？」

「ああ、そうだ。死にたくなかったら走れ。奴らを集団で相手するのは厄介だ。だからここでやり過ごす。」

「そんなの嫌よ！私は貴族なのよ！」

「あいつらに常識が通じないのはさっきわかっただろう?。」

「うう……。」

ルイズは唸った後何も言えなくなってしまった。アーサーはよしと言わんばかりに頷くと3人を見回した。

「異議があるものはいないな!では、死ぬ気で頑張ってくれ。」

その言葉と同時に4人は走り出した。木々が生い茂る真つ暗な森を深くはいつて行った。

BIOHAZARD 0（の使い魔）・アルビオン黙示録 3（後書き）

感想、ご意見お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4286q/>

ハルケギニア物語～SSをかける少年～

2011年10月1日02時34分発行